月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１１１号　　平成３０年４月１７日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

平成７年当時の第一海軍航空廠飛行機部第二工場
戦後 50 年の風雪に耐えてきたが，取り壊し決定。私達は、昭和 19 年７月より昭和 20 年８月まで，この航空廠の中で主として零戦の修理を行って来た。私達の青春はここを初舞台として開始されたと言っても過言ではない。（『戦いのなかの青春』より）

戦時下の土浦中学生１２
～第一海軍航空廠・学徒たちの戦い２～　（霞ヶ浦その 24）

土浦中学では、1944（昭和 19）年７月 11 日に第一海軍航空廠（一空廠）に入廠した４年生（中 45 回）に続いて、翌年１月 30 日からは３年生（中 46 回・47 回：昭和 17 年入学、昭和 21 年４年修了で卒業が 46 回、昭和 22 年５年修了で卒業が 47 回）も入廠、３月７日には２年生（中 48 回）も入廠しました。更にその年の６月 18 日には２年生（中 49 回）345 名も一空廠に入廠しました。今回から学徒たちの各職場での戦いを描いていきます。
文中の【　】内は筆者による注記です。

通勤

土中 45 回生の工員養成所寮での生活は、父兄や教師陣の骨折りで、２ヶ月ほどで終わり、通勤が可能な生徒は、自宅から一空廠へ通うようになりました【土中生は９月 18 日(月)から、土浦高女生は 10 月１日(日)から】。近隣の生徒は、徒歩や自転車で通勤しました。中には、藤沢村【現土浦市藤沢】の自宅から右籾の一空廠まで、往復 30 km 余の道程【みちのり】を自転車で通った生徒もいました。朝早く家を出て、残業で帰りは遅くなりましたが、灯火管制下だったので、暗闇の中を無灯火で走っていました。

遠方の者は、筑波線や常磐線を利用しました。その頃の通勤について、中 48 回・高１回の屋口正一は、『櫻水物語　戦中派の中學時代』の中で、「通勤列車」と題して、次のように記しています。

「この頃の客車はスシ詰めを緩和する為三人掛、デッキ寄りの椅子を外したり天井からつかまり棒が下っただけのロングシート車などの改造車が目立って来た。黄緑色のシートは引裂かれたままだったり、代りに南京袋が被されたりで荒れていった。客車と客車間の幌は破れて、連結器の下にはレールが走った危険なのも屡々【るる・しばしば】あった。乗客はデッキのステップに迄あふれた。

荒川沖駅は一空廠朝の顔の一つである。

通勤列車が駅にさしかかると、人々は先づホーム側の車窓をおろす。現在の車輌は総べて上方へ持ち上げて開けるが、当時は車体外板と内張との間へ下げ降ろす方式だった。網棚へ両手を掛け両足を車外に出し、窓枠に腰掛ける格好で降車用意をする。列車が止るや否や上体を外に出しホームに飛下りる。デッキからは勿論窓といふ窓から一斉に出た人々は、一ケ所の跨線橋めがけて馳け寄る。昔乍らの狭い橋なのでホームはしばし人の群で埋った。

下りホームへ渡って駅舎（当時は西口のみ）を出た人の流れは、十段程のコンクリート階段を馳け降り、岡谷館【合資会社岡谷館製糸荒川沖工場】あとの倉庫の横を通って常磐線踏切へと急いだ。通勤列車から吐き出された人の波は、早春の朝靄の中帯の様に一空廠まで連ったのである。」

1945 年に入ると、空襲が激化し、艦載機による銃爆撃も行われるようになり、通勤も命がけのものとなりました。その当時の状況を土浦高女４年生であった杉本光以【兵器部航空図板係】は、『戦いのなかの青春』に「生命」と題して、次のように綴っています。

「毎朝、航空廠へ出勤する前には、母や妹と水盃【みずさかずき】を交す、『ただいまかえりました』の声がするまで家族の心配は、私の想像を絶するものであったに相違ない。

（略）

勤務日は、土曜日・日曜日のカットされた戦時体制で、月、月、火、水、木、金、金。休日は二ヶ月にたった一日だけでした。

朝六時半、自転車に乗って山また坂を幾つも越えて、七時やっと職場にたどり着く。

（略）

帰り道、あっ、敵の艦載機が近づいた。自転車を放り出して、道端の林の中に夢中で隠れる。パチパチと機銃掃射の雨、死んで当り前の人命の価値、危機が遠のいた頃、又、自転車を走らせた。

途中に食用配給券無しで、ウドンを食べられる店があるというので立寄る。ウドン汁は塩水、出し汁と具は鯨の皮だけで、ゴム靴を噛んでいるのと同じ。歯の跡もつかず、何の味も臭いもしなかった。

帰宅してホッとする間もなく、警戒警報のサイレンが鳴ると、自作の防空頭巾を被って、家族で作った庭先の防空壕に入る。雨が降ると、水がガバガバと溜りくみだしても直ぐに溜ってしまう。

勉強などという言葉は何処かへ消え失せ、生命の有無の線上をさまよった。」

（略）

現場配属

1944 年７月 11 日(火)に入廠した土浦中学４年生（中 45 回）は、養成班・教育班での訓練・実習が終わり、29 日(土)から現場配属となりました。その職場での勤務状況等を記した日記【「勤労動員学徒の日記抄」（『戦いのなかの青春』所収）】の一部を紹介します。

(1)中 45 回　風間　雍【飛行機部第二工場仕上班】

昭和一九年八月二一日(月)晴天

本日から【飛行機部第】二工場に配属された。自分は六人組んで仕上の渡辺組になった。仕事は降着装置関係のもの、早速少し組立をする。定時終了帰舎後二

階の者は部屋の天井を外させられた。焼夷弾が天井に止まるのを防ぐためであった。

八月二二日(火)晴天

零式艦上戦闘機の脚基部取付け、初めてでなかなか難しかった。本日より二時間残業となる。大分腹がへった。薄暗くなり帰る。夕食時リンゴジャムを二人に一瓶ずつ配給あり。甘かった。平時には一回も食べたこともないものを戦時に食べたことは笑止である。

八月二四日(木)晴れ後雨

出廠、作業完成の域に達せず、定時終了。帰舎後洗濯。岡野、村松、高野三君の入隊による餞別一円五〇銭。

八月二五日(金)晴天

出廠、夜間戦闘機「月光」改装完了、いよいよ征く。

八月二七日(日)晴天

日曜日なので養成所にて教練、作業の疲れでハリキッテできない。飛行場の隅に行き対空射撃訓練、麻生中生は外出で羨ましかった。午後は講堂にて教練学科、三時終了後昼寝などして休養。

八月二九日(火)晴天

朝の作業前に部長訓示。作業は少しは進捗せり。二時間残業、帰舎夕食後直ちに食堂にて中学生徒演芸会を催した。皆非常にうまく愉快に過ごす。中隊別では二中隊が一等であった。一一時終了、直ちに就寝。

九月二日(土)晴天

廠内に大分赤痢が流行の様子、十分注意が必要。二時退廠、講堂にて七月分の報酬一人当り一〇円支給、その後小林少尉から土空【土浦海軍航空隊】適性部の話あり。四時より外泊許可。夕食をせずに直ちに帰宅、疲れたので風呂に入ってすぐ寝る。

九月三日(日)晴天

六時三〇分起床、一時間寝坊する。何することもなく一日中休養、食事は色々御馳走があった。午後ともなれば直ぐ帰舎の用意だ。一つも落ち着かない。五時に家を出て汽車にて無事帰れり。

入寮後1ヶ月余、航空廠や寮での生活にも慣れてきたようですが、いかに若いとは言え、残業も始まり、休日もない生活に疲れも溜まってきたようです。

(2)中45回　来栖三男【飛行機部第二工場板金班】

昭和二〇年一月一日(月)曇りのち晴

朝方、警戒警報発令。九時半までに登校、新年の拝賀式。工場動員で学校をでたのが七月だから、約半年たったわけである。佐久良東雄先生の歌碑が玄関前にたてられ、新講堂の骨組みができている。諸先生の顔を見られるのも何となくなつかしい。工場での生活から見れば、学校で授業を受けていた頃が思いだされ、学校生活がいかに幸福だったかと考えさせられる。式後、海軍気象関係の就職募集のための講話を聞いた。

一月二日(火)晴

作業は【損傷した零式戦闘機】一九七号のフラップの鋲の打ち替え。完備検査にあっさり通るよう努力しよう。(註、零式戦闘機の翼関係の修復が私の主作業)

一月三日(水)晴

元始祭。一〇一二号のタンクと三八六号の翼端の修理作業。定時間で終わる。パンと菓子の配給券を渡される。

一月四日(木)曇りのち晴

一〇一二号修理。友人が昼食の弁当を蒸気で暖めて高橋少尉に叱られる。りんごの配給券を渡される。帰宅と同時に警戒警報発令。(註、通勤は自転車利用、土浦幼稚園に近い自宅を午前六時二〇分には出発、午前七時には入廠した。早朝の通勤と冬の作業は身体には辛かった)

一月五日(金)晴

寒い、コンクリートの工場なので脚が冷える。一〇一二号の翼端修理。帰りには西風が強くて、耳がいたくなる。

一月六日(土)晴

一〇一二号の修理と九五号修理。午後二時作業終了後、養成班に集合。服装の点検と上級学校進学希望者への諸注意。

一月七日(日)晴(しぐれあり)

休む日なのに総員出動。

「動員学徒の集いで、神風鉢巻を掲げる中45回大津一郎」(平成7年4月10日)

私達が「神風」の鉢巻を締め……と、50年前の汗に黄ばんだ鉢巻を掲げ絶句する大津一郎。参加者のすすり泣きの声が聞こえ、一同50年前にタイムスリップして感無量。(「戦いのなかの青春」より)

一月八日(月)晴

大詔奉戴日。【太平洋戦争開戦の詔勅が出された1941年12月8日を特別に記念する日。42年1月2日の閣議で決定され、同年1月8日を第1回とし、以後毎月8日を大詔奉戴日とすることになる。国民の戦意高揚を図る目的で採られた措置の一つ。】

朝の式あり、部長訓示、神風鉢巻伝達式。工員の一部は「雷電」や「紫電」の改造に。第二工場編成がえ。

一月九日(火)晴

空襲警報発令。

工場のなかは神風鉢巻ではりきっているようにみえる。

七九二号の主脚カバー完成。班長が直接われわれを受け持って総力発揮の作業。

一月一〇日(水)晴

一〇一二号の主脚カバー修理中。朝礼で、鉢巻をなぜ着けないかと川上少尉に注意を受ける。

空襲が日増しに激しくなり、学徒たちの戦いも銃後の戦いではなく、最前線同様のものになっていきました。

※参考文献
『戦いのなかの青春』
(戦後五十年　卒業五十周年　第一海軍航空廠動員学徒の集い記念誌)
『櫻水物語　戦中派の中學時代』
(中48回・高1回　屋口正一)

(高21回　松井泰寿)

※　アカンサスは、進修同窓会のHPに創刊号から掲載されています。アドレスは、http:www.sin-syu.jp/ です。バックナンバーをご希望の方は、進修記念館(一高構内)2階の同窓会室(執務日:火曜日9:30～15:30)までお越し下さい。

月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１１２号　　平成３０年５月８日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

第一海軍航空廠飛行機部第二工場前で往事を偲ぶ動員学徒たち
（土浦中学 45 回生と土浦高女 39 回生）（平成７年４月 10 日）
「私達は、昭和 19 年７月より昭和 20 年８月まで、この航空廠の中で、主として零戦の修理を行って来た。私達の青春は、ここを初舞台として開始された、と言っても過言ではない。」（『戦いのなかの青春』より）

戦時下の土浦中学生１３
～第一海軍航空廠・学徒たちの戦い３～　（霞ヶ浦その 25）

第一海軍航空廠（一空廠）は、横須賀鎮守府に所属し、その内部編成は、総務部・補給部・飛行機部・発動機部・兵器部・会計部・医務部及び工員養成所をもって構成されていました。学徒たちは、養成班・教育班での基礎訓練が修了すると、補給部・飛行機部・発動機部・兵器部の各現場へ配属となりましたが、土中生の多くは飛行機部に配属されました。今回は飛行機部での学徒たちの作業の様子を綴っていきます。文中の【　】内は筆者による注記です。

飛行機部大型組立工場

飛行機部の主要業務は、「飛行機機体、プロペラ、落下傘及其ノ属具ノ造修工事、飛行機ノ装備及兵装工事並ニ此等ニ必要ナル工事用材料物件ノ整備及検査ニ関スルコト」（海軍航空廠處務規程）と規定されていましたが、戦争の激化に伴って、損壊機の修理や性能向上のための改造作業が多くなってきました。更に、戦況が逼迫した1944年以降になると、新型飛行機の製造やそれの前線への補給も行われるようになりました。

中48回・高1回の屋口正一は、その著『櫻水物語　戦中派の中學時代』の中で、飛行機部の大型組立工場について、次のように記しています。

「飛行機部大型組立工場は、当時の感覚からすると正に『巨大』であった。東西約一一〇米南北約一八〇米、四〇年後の今日ですら六〇〇〇坪の建物はザラにはない。建屋内には『天山』『零戦』『雷電』等がウヨウヨ入って居り、翼巾約二五米の『一式陸攻』や『銀河』迄が小さく見えたのであった。

大きさと共にその内部の緊張感も驚きの一つであった。ほぼ中央のトーチカを思はせる、分厚いコンクリート製カプセル型監視塔は銃眼付で不気味であった。そこには執銃帯剣の衛兵が立哨してゐた。

高い屋根裏から長いコードで金属笠に百燭球が下っても場内は猶暗く、コンクリート床は所々ヒビ割れや凹みがあって、油が黒く染み込んでゐた。

場内の各機は被弾生々しいもの、胴着したもの改装中のもの等が修理整備を急いでをり、その搭乗員か関係者らしい飛行服姿の兵が付添ったり行き交ひ、工員も学徒も黙々としかも馳歩的速さで作業に携ってゐたのである。」

飛行機部での作業

土中生たちは、飛行機部で、主に事故機の修理を担当しましたが、前出の屋口正一は同書の中で、修理作業の様子を次のように書き留めています。

「事故機には《胴着》が多かった。胴着とは引込脚が出ないまゝ降着するものであるから、宙返り状に転倒するか停止する迄胴体そのもので地上を滑走する。従って先づプロペラがタコの足の様に曲る。胴体下側はメクれ、ハガれ、凹み、そして草を食ひ込んで変形してゐた。修理作業は機体を先づ支持台に乗せプロペラを外す。これをペラ屋（プロペラ工場）へ運ぶ。次は胴体屋の仕事である。電気ドリルでリベットを抜いて外板を一枚づつ順次はがす。枠のゆがみ、折損、機銃で射抜かれたところを調べる。計器屋も操縦席にもぐり込み、一機に三、四人がはりついて手作業で何日もかかる。

やがて元通り組立てが終り塗装も仕上って、南側の通用門から引込線を越して手押しで飛行場へ送り出した。程なくエンヂンを始動し爆音高く…特に雷電のキーンといふ独特の金属音…試飛行した音を聞いた時の嬉しさ喜びは格別であった。【工員達は銅工をブリキ屋、溶接工をガス屋と呼んでいます。】」

土中 45 回生の作業

中学45回生は、実習終了後、簡単な適性検査で、旋盤などの機械工作組と仕上・銅工などの手作業組とに分けられ、1944年８月から、飛行機部の各部署に配属となりました。以後、終戦の８月15日までの１年間、学徒たちの戦いが続けられましたが、その作業の様子を『戦いのなかの青春』より抜粋してみます。

(1) 部品作り

○中 45 回　坂井祥司（飛行機部第二工場　仕上班）

「仕上班での最初の作業は、爆弾懸架器の部品とかで、ケガキ線が画かれた薄い鉄板をヤスリで削ったり万力を使って曲げたりして何種類かの部品を作り、その部品を溶接場へ持って行った。溶接場では潮来高女【現潮来高校】出の若い女子挺身隊の人達が黒い保護眼鏡を掛けて、並んでガス溶接作業をしていた。そこで部品と部品とを溶接付してもらい、終わったら砂噴場へ行って噴砂で溶接汚れを落としてもらった。つぎに塗装場へ行って黒く塗ってもらって帰って来るといった持ち回りでの部品作りをやった。仕上班から少し離れた場所では土浦高女【現土浦二高】の動員学徒が大勢まとまって作業していた。」

○中 45 回　廣瀬琢朗

「私の航空廠での作業は飛行機の部品作りである。型を使って可成りの厚い鉄板（五～六ミリ位）に外形を罫書きし、タガネとハンマを使用して先ず外形に近い形に切り取り、その後ヤスリを使って仕上げるという割りと単純な作業である。タガネには指を叩かないように保護用のゴム板をつけるが、最初はハンマが

タガネに当たらず（ハンマを大きく振らないと鉄板が切れない）ゴム板を叩くことが多く、そのすごい衝撃で忽ち手が腫れあがってしまう。自信を失うと益々的を外すようになり、馴れるまでに一ヶ月以上を要し、機体の鋲打ち作業班がつくづく羨ましく感じた事を覚えている。

この時、私達学徒を親切に作業指導してくれたあどけない少年は、私達より二歳位年下で台湾出身と後から指導員に伺った。おそらく、当時【日本領であった】朝鮮や台湾などから相当数の人が強制連行されてきたものと思われる。いま考えれば気の毒な人たちである。

航空廠での私達学徒の直接監督者は、技術将校の方達で職業軍人でないだけに皆紳士であったが、或る時グループの一人が何かのミスを出し全体責任ということで、理由が判らないまま全員殴られ、軍隊という世界を垣間見た気がした。

（略）

『丸大』と称する人間爆弾や飛行場に並べる木製のオトリ機などを作って日本の国はどうなるのだろうかと思いながら、一方では『神風は必ず吹く』と信じひたむきに作業に精進した純真な少年の姿をいま誰が理解できようか。」

やすりかけの練習をする都立第三商業生
指導を受けて，直ちに万力に取り組み，やすりかけの猛練習（『アサヒグラフ』1944・昭和19年5月3日号より）

(2) 旋盤作業

○中45回　玉井正夫（飛行機部機械工作組　旋盤班）

「第一海軍航空廠では、確か簡単な技能テストを受け旋盤部に配属された。当時貴重な工作機械である六尺旋盤を一人一台で担当し、マイクロメーターによる千分の何ミリ内の誤差での鉄棒の切削はかなりハードな仕事であった。製品材料が貴重なアルミや銅になると、不良品が出せないため、極度の緊張をも求められた。その上数少ない旋盤のフル稼働のため、昼夜十二時間交替の作業を行った。飛び散る切削油や機械油で黒く汚れた作業服、切削時にでる鉄粉を含んだ紫煙の中で、全員何一つ不平もなくよく頑張ったものである。冬の深夜、カンテキ【しちりん：七輪・七厘（価が7厘ほどの炭で間に合うの意からという。）。炭火を熾したり、煮炊きをしたりするための簡便な土製の焜炉】の上に置いて暖めた弁当を、車座になってお互い励まし合いながら食べたことが、今もって忘れられない思い出である。各自、口には出さなかったが、鬼畜米英撃滅のため、何事も勝つためにという一生懸命にして真摯な姿がそこにあった。」

○中45回　柴沼　弘（飛行機部機械工作組　旋盤班）

「朝六時から夕方六時までの一週間の次は、夕方六時から朝六時までの夜勤。機械は二四時間フル運転だ。ある夜、作業服の裾を歯車に噛まれた。半ばちぎれた服をみて、大きな怪我になるところだったとゾッとした。立ち作業で疲れ、油断があったのかも知れない。」

(3) 零戦修復

○中45回　篠田　康（飛行機部第二工場　銅工班）

「【動員されて5ヶ月が経った頃から、零戦の修理組立作業の各部分を動員学徒が分担して行い、完成させる作業方法が採られた。】零戦を我々だけで一機修理するように命ぜられ、162号機を手掛けることになり、私の分担はキャブレター（過給器）のカバーであった。完成して試験飛行の時には乗せてもらえるぞという声も聞こえて、皆んな一生懸命になって取組み、相当熱の入った仕事をしたのだが、テストフライトは失敗に終わったと聞かされて、大変残念であった。然し、再び工場に戻って来た様子もないのでどうなったのであろうか。不思議に思えた。」

(4) 赤トンボ主翼調整・零戦ボルト収集

○中45回　熊木久義（九三中練組立と零戦ボルト屋）

「飛行中に操縦桿を手放すと、水平飛行を持続するという複葉機九三中練【正式には、九三式中間練習機。通称「赤トンボ」】は世界一の練習機といわれていた。胴体や翼の外装はジュラルミン張りではなく麻布製の羽布張である。この羽布張が曲者で、所定の位置以外に足を乗せたり、うっかりスパナを落そうものなら直ぐに穴をあけてしまう（もっとも、直ぐに切貼りすれば修理出来るのだが）。

二枚の主翼のうち下翼は上翼より後方にセットされた。後方にずらすには、ターンバックルつきの張線でコントロールされる。この時一人の者が物指をあてOKをだすことになっていた。じっと物指をもっているのも大変な仕事である。私達動員学徒は、化学実験用のスタンドに測定尺を保持させれば、一人分の省力ができると熟練工の班長さんに提案した。班長さんは早速、木工部に発注した。これは航空廠内の発明展で二位になった。この時の一位は手動式ストッパー付きのガソリン注入用漏斗であった。『ガソリンの一滴は血の一滴』といわれた当時ではむべなるかなである。

戦局が次第に激化し神風特別攻撃隊が出撃するようになり、九三中練の脚に爆弾をワイヤロープで固定して特攻機仕立てをするとの話が出てきた頃、私達は零戦の修理部門へ移った。

零戦は年々改良されその性能を高めていった。これが、また、私達ボルト屋泣かせであった。ボルト屋は、零戦の使用するいろいろな太さ・長さ・形のボルトを準備して置かなければならない。しかも、締付けたナットが緩まないように『割りピン』を入れる細い孔をボール盤であけねばならないのである。

同じ零戦でありながら型式の別はもとより、同型式のものでも三菱重工業製造のものと中島飛行機製造のものとでは同じ部位のボルトに微妙な差異があるのには恐れ入る。このため、私達ボルト屋は暇をみてはスクラップ機の置場（解体部）へ行って、稀少のボルト収集をしていたのである。」

※参考文献
『戦いのなかの青春』（戦後五十年　卒業五十周年　第一海軍航空廠動員学徒の集い記念誌）
『櫻水物語　戦中派の中學時代』

（中48回・高1回　屋口正一）
（高21回　松井泰寿）

月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１１３号　　平成３０年６月１２日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

昭和 20 年３月 10 日午後１時玄関前での土中 45 回卒業記念写真
（中 45 回大塚保氏蔵）

既に軍関係学校などへの入学・入隊者は陸士・海兵・予科練等 20 名以上あり、この写真には宗光杢太郎校長を含め 170 名が写っている。

戦時下の土浦中学生１４
～第一海軍航空廠・学徒たちの戦い４～　（霞ヶ浦その 26）

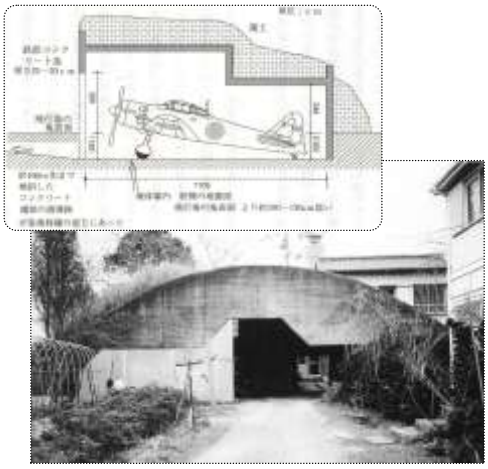
1944（昭和 19）年７月６日、マリアナ諸島のサイパン島が陥落し、そこから発進した米軍機による本土空襲が始まりました。霞ヶ浦海軍航空隊・土浦海軍航空隊（予科練）・第一海軍航空廠（一空廠）などの軍事施設が集中していた阿見地区は、しばしば空襲に見舞われました。今回は、学徒たちの空襲下での戦いを『戦いのなかの青春』・『櫻水物語　戦中派の中學時代』をもとに描いていきます。引用文中の【　】内は筆者による注記です。

本土初空襲

1944年11月以降、偵察飛行を行うＢ29の姿が、土浦の上空でも、度々見られるようになりましたが、サイパン島を発進したＢ29が本土を初空襲したのは、11月24日でした。約80機が編隊を組んで、正午過ぎ、東京上空を高度約9000ｍで西進し、中島飛行機武蔵工場（現在の武蔵野市にあった。）を爆撃しました。そのうちの１機が阿見地区に侵入し、君原村上空を通過する際に、海軍の木原送信所（美浦村木原地区にあった。現美浦村自立支援センター付近）を機銃掃射しました。その流れ弾とみられる曳光弾（弾の飛ぶ方向を確認できるように燃えながら飛ぶ弾）の１発が、石川地区の民家の屋根に命中し、茅葺き屋根に火が付き火災が発生しましたが、発見が早かったため、被害は最小限で食い止められました。

中45回の風間雍は、この日の日記に、「一一月二四日（金）晴天　作業平常どおり。一二時空襲、待避三時間余、壕より首を出すと空一面飛行機雲だ。高高度で敵機が侵入したのだ。Ｂ29の編隊もはじめて見た。」と記しています。

1945年に入ると、空襲が頻繁になってきました（中45回の栗栖三男の、１月１・４・９・27日、２月10日の日記には、「警戒・空襲警報発令、待避」の記載が見られる。）。学徒たちは、警報が発令される度に作業を止め、壕に埋められたときの脱出用として、鑢などの手頃な工具を１個ポケットに入れ、工場内にある完成間近な飛行機を皆で押して掩体壕へ運び込み、それから待避壕の中へ入りました。壕は、天井を板材や木の柱などで支えた手掘りの横穴で、照明はなく両側に腰掛けが付いていました。奥行きは10ｍ位で、その先はＴ字型に掘られていました。天井と地表面は優に５～６ｍと厚く、機銃弾も届かないと思われましたが、爆撃時だけはパラパラと砂が零れ落ちることもありました。空襲が終わると壕から出、掩体壕から飛行機を引き出して工場へ戻し、再び作業を始め、遅れを取り戻すべく残業が続けられました。



旧零戦用掩体壕とその断面図
（いずれも山田敏子氏所有）

一空廠初空襲

２月16日、一空廠が初めて敵機の攻撃に見舞われました。グラマンＦ６Ｆなどの艦載機が数次に亙って来襲し、発動機試運転場・大型組立工場の北側などに被害を受け、死傷者も出ました。

この日、学徒たちが朝礼に出ると、拡声器から「本日の朝礼は行わない。」との放送があり、直ちに警戒警報、続いて空襲警報が発令されました。全員が緊張感に覆われて防空壕に退避。午前中に２回、数機が波状攻撃、一空廠や飛行場周辺に設置してある機関砲が一斉に火を噴いて、さながら最前線のようでした。正午過ぎには大音響とともに、１機が第四門札場近くに墜落しました。グラマンを追跡して来た零戦でした。不運にも味方の誤射によるものでした。炎上しながら搭載した機銃弾が弾け飛び、消火隊も暫くは手が着けられませんでした。

警報が解除されて工場に戻り、昼食が終わる頃、「総員退避用意」の発令で再び防空壕へ。グラマンの20機編隊が一空廠を襲いました。女子生徒も慌ただしく作業台を離れ、一目散に所定の防空壕に全速力で避難。最後の女生徒が壕の入口に辿り着いたその時、猛烈な爆風が襲って来て、その女生徒は壕の真ん中辺りまで吹き飛ばされました。幸い生命に別状はなく、怪我もありませんでした。壕の中にまで高射砲の音や爆弾の破裂する音が聞こえて来ました。女生徒たちは泣いていました。

17時18分、空襲警報が解除となり、学徒たちが薄暗くなった職場に戻って見ると、大型組立工場の北側（解体工場側）に250kg爆弾１発が命中、北側の屋根の鉄骨は飴のように曲がり、「桜花」工事部分は目茶苦茶になっていました。「桜花」工事のすぐ側にあった零戦脚部修理班の万力台が逆立ちしてしまい、作業台は跡形もなく吹き飛ばされ、その所に擂鉢型の大きな穴が不気味に空いていました。目の前の変わり果てた光景に女生徒全員が思わず号泣。それを聞きつけた男子生徒が、大声で「戦時下の女学生が、これ位のことで泣くな！」と一喝しましたが、一喝した男子生徒の目にも涙が溢れていました。女生徒たちは、この日の被害やその他の一切を決して口外しないことを誓い、きっとこの仇は討つぞ、との思いで涙ながらに帰宅しました。

この空襲で初の戦死者が出ました。戦死者は付近の松林の中で火葬に付され、その遺骨は上司や同僚の手によってそれぞれの故郷に届けられました。

卒業式

３月９日夜、Ｂ29の大編隊が日本本土に接近。東京へは279機が高度2000ｍという低空から侵入し、10日午前０時７分から約２時間半に亙り、町工場と住宅とが犇めく市街地に爆撃が続けられま

した(いわゆる『東京大空襲』)。B29は、長時間燃焼するナパーム弾を江東区・墨田区・台東区に跨る40平方キロの周囲に投下し、その内側には1665トンの焼夷弾を投下。市街地は完全に火の海と化し、26万8358戸が焼失、100万8005名が罹災しました。死者は8万3793名、負傷者4万918名(警視庁調べ)とされていますが、実際の死者は10万名を超えたと言われています。

土中生たちは、夕焼けのように真っ赤に明るくなった東京の空を眺めながら、卒業式の朝を迎えました。中45回生は、1943年1月に公布された「中等学校令(勅令第36号)」により、修業年限が1年短縮され、1年先輩の中44回生と同時卒業となりました。卒業式は常磐線の遅れで午前10時に開始され、『海ゆかば』を歌って式を閉じた後、44回生は射撃場で、45回生は玄関前で、戦闘帽姿の記念写真を撮って解散しました。

3月12日の麻生中での卒業式には、一空廠から動員学徒の代表者が出席しました。3月31日に一空廠兵舎内の浴室で卒業証書伝達式が行われ、校長から卒業証書が授与されましたが、証書は紙質の悪い、なんとも小さい、形ばかりのものでした。

土浦高女の卒業式は3月18日に行われ、生徒たちは最後の校歌で胸がいっぱいになってしまいました。式後、名残を惜しんで各教室でお喋りをしていると、空襲警報が発令され、懇談の途中でのバラバラな別れになってしまいました。

しかし、「新規中等学校卒業者の勤労動員継続に関する措置要綱」によって、卒業生たちは、中等学校に新たに設けられた付設課程に進学させられ、動員はそのまま継続となりました。また上級学校進学者や軍関係学校入学者に対しても、入学3ヶ月延期の措置が採られたので、彼らも6月23日及び27日まで工場勤務を続けました。

神風の鉢巻を締めて若さ漲らせた土浦高女生
(昭和20年3月18日卒業式の日 石塚写真館で)
(『戦いのなかの青春』より)

空襲激化

3月26日に硫黄島の日本軍が玉砕。硫黄島米軍基地の整備が進むと、本土爆撃はますます激しくなり、加えて米機動部隊から飛来する艦載機の襲来も日常化してきました。艦載機の空襲は昼夜を分かたず、地域も、全国の都市から農漁村にまで及ぶようになりました。攻撃目標は、飛行場や軍事施設はもとより、走行中の列車、航行中の船舶、農耕従事者などの民間人にも及び、空襲に関しては内地も戦場と変わらなくなりました。

沿岸各地に設置された電探(レーダー)が、南方洋上に敵目標を発見し、本土接近を通報すると、廠内放送は「ブーッ」というブザー音とともに、「第二警戒警備と為せ!」との指令を発しました。程なく空襲警報が発令され、「女子並びに動員学徒退避!」の命が下り、「総員退避!」はその後に発令されました。時として、けたたましい空襲警報と同時位に「総員退避」が発せられることもありました。工員・軍人など全員の退避が終わると、廠内は一時不気味に静まり返るのが常でした。

5月28日には、P51戦闘機30機が侵入し、一空廠の建物2棟と第一軍需工廠(前中島飛行機若栗工場。零戦の組立が行われていた。現三菱化学(株)の建物1棟とが全焼、民家では全半焼家屋2戸、死亡者1名、負傷者3名の被害を受けました。この頃になると、一空廠の工場や海軍施設が近隣の山野に疎開したため、これが新たな攻撃目標となり、付近の住民が被害を被ることにもなりました。

6月10日・予科練空襲

6月10日には、土浦海軍航空隊(予科練)とその周辺地区とがB29による大規模な空襲を受け、多くの軍人・町民・家屋などが被災し、予科練生を含む374名が亡くなりました。予科練の南西地区の兵舎群は完全に吹き飛び、周辺には手足のない死体が散らばり、「海鷲のゆりかご」は、一転して阿鼻叫喚の地獄絵図のような光景を呈していました(詳細は本紙89号に掲載している。)。

この時、一空廠に出勤していた中45回の高橋邦男は、「航空廠での想い出」として、『戦いのなかの青春』に次のように記しています。

「学校は卒業したものの、土中生として引続き航空廠に通った。忘れもしない、六月一〇日は日曜日であったが、私は、下級生二人と出勤していた。当日は、早朝より空襲警報が鳴り、工場近くの防空壕に避難した。間もなくB29や艦載機が、大挙来襲して来て、航空廠の上空に差し掛かった途端に、爆弾の落ちて来るのが分かった。ヒューと言う嫌な空気音がしたかと思うと、腹を抉る様な地響きがして、防空壕の砂がサラサラッと落ちて来た。

我々もいよいよ最後の時が来たかと思った。長時間の波状攻撃が止んで、東の空を眺めると、【土浦海軍航空隊の一帯に】黒煙もうもうと立ち込めて、爆弾の物凄いことがわかった。」

また、中48回生は、学校で空襲に遭遇しました。

屋口正一は、その時の様子を

「この朝土中三年二組の生徒の殆んどは、動員以来約三ヶ月振りに登校した。未完成の新講堂には万力台が並び、校庭には九三中練が駐機されてゐた。学校へ着く前に早くも警戒警報が発令された。そして大部分の生徒が校内に入った頃空襲警報のサイレンが鳴った。生徒は分散して柔道場北側裏門寄りの壕に入った。上部は土かぶりが薄く、至近弾にはとても耐へられさうもないものであった。それでもいつもの避難時と同じく、帯芯製の袋から防空頭巾を出して被った。

空は雲で覆はれてはゐたが明るかった。その時異様な音が聞こえた。雨か雹でも降る様な『サーッ』といふ風を切る音である。暫し途切れたと思ったとたん、ズズーンと腸(はらわた)に響く震動が大地から伝はった。音と響きは繰り返し続いた。そして少しづつ移動する様にも思へた。」と綴っています。

更に、7月10日には、右籾の林の中で3名の女子挺身隊員が機関銃弾を浴びて戦死するなど、空襲はその後も続きました。しかし、一空廠の2万余名もの軍人・工員・女子挺身隊員、そして動員学徒は、犠牲者を出しながらも、昼夜兼行で、渾身の力を振り絞って終戦まで働き続けました。

※参考文献
『戦いのなかの青春』(戦後五十年 卒業五十周年 第一海軍航空廠動員学徒の集い記念誌)
『櫻水物語 戦中派の中學時代』
(中48回・高1回 屋口正一)

(高21回 松井泰寿)

月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１１４号　平成３０年７月１７日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

谷田部海軍航空隊
飛行科分隊
（『谷田部海軍航空隊記念碑建立にあたり　平成25年5月19日』〔財団法人筑波麓仁会〕より）

谷田部海軍航空隊本部
（『谷田部海軍航空隊記念碑建立にあたり』より）

戦時下の土浦中学生１５
～第一海軍航空廠・学徒たちの戦い５～　（霞ヶ浦その27）

1944（昭和19）年10月のレイテ沖海戦において、神風特別攻撃隊（敷島隊・大和隊・朝日隊・山桜隊の計24機）が初出撃して以降、特攻作戦が続けられました。そのため、第一海軍航空廠（一空廠）でも特攻機への改装作業や特攻機「桜花」の製作が行われ、学徒たちもその作業に従事しました。

引用文中の【　】内は筆者による注記です。

爆装工事

爆装工事とは、零戦などの特攻機に爆弾を抱える装置を取り付ける工事で、一空廠では、学徒たちによって爆装部品も作られていました。鉄板を切断し折り曲げてU字型とし、溶接加工して250kg爆弾懸架の枠を作る作業などでした。更に、学徒たちは一空廠から谷田部海軍航空隊へ出張し、そこでの特攻機への爆装工事にも携わっていました。

谷田部海軍航空隊は、1945年3月1日付けで、練習連合総隊の指揮下から、新たに編成された第十航空艦隊の下に置かれ、連合艦隊に編入されました。そのため、従来実施されてきた操縦要員の教育訓練は中断され、部隊は、教育訓練部隊から実戦部隊に変わりました。この第十航空艦隊は、沖縄作戦に投入する部隊でしたので、全国から特攻要員が集まり、整備の終わった飛行機を順に受領して、鹿屋・指宿・国分・串良などの九州各地の基地に進出し、順次出撃し散華していきました。

1945年6月14日に谷田部海軍航空隊へ出張した中45回栗栖三男は、その日の日記に次のように記しています。

「【作業の】準備して【海軍のネイヴィイブルーのトラックに乗り込み】出発は一一時半頃、到着は一二時一五分頃であった。零戦五〇番爆装作業。下士官に『君たちは何しに来たんだ、見学か』と言われ、『爆装作業に』と言うと『君達が……』と言って目を丸くしていた。工員と七機体に工事する。われわれの機体は夜の一一時頃完成。川上・篠田・野沢・小松・細田君らと布の上に朝五時頃まで寝てしまった。一五日は八時一五分航空隊を出て一空廠へ。（『戦いのなかの青春』）」

零戦への爆装工事は、簡単なようでとても難しい作業でした。250kgや500kgの爆装をすると、飛行機の重心が変わり、離陸できないことも出てきます。ここでは、重量計算をしてきちんと位置を決め、万全の対策を講じる必要がありました（爆弾は後で鹿屋などの出撃基地で取り付ける。）。爆装工事が終了すると、隊付きのテストパイロットが試験飛行し、合格となれば、それを16機単位（特別攻撃隊では、4機での1編制を基本とし、4の倍数機で編隊を組むことが多かった。）で特攻要員に引き渡しました。

谷田部海軍航空隊での爆装工事は、徹夜となることも多く、寝られたとしても格納庫の片隅で仮眠するくらいで、大変な作業でしたが、常に空腹を抱えていた学徒たちにとっては、夢のようなことがありました。中45回篠田康は、『戦いのなかの青春』に、次のように述べています。

「作業は爆装工事といって、零戦の特攻機に爆弾を抱える装置を取り付けるのだった。零戦の下面カバーを外して新規に爆装を設置するのだが、二泊三日の出張で、一回の旅費は十六～七円になる、然し今お金を貰っても何も買えないし、どうせ給料と一緒に通帳に振込まれるだけだが、それにしても高い金額だと思った。

この出張で何より嬉しかったのは、お金よりも【現物】給与のよかった事だ。食事のテーブルに着くと、銀シャリが山盛り盛ってあり久しく見ていないので、美しい女学生に逢った時のように、マブシく感じる。汁椀には豚汁がタップリ、お菜皿には切り身の焼き魚、漬物が付いて、お酒が一合、タバコが十本、それに大きな大福餅が付いているではないか。砂糖で小豆を煮た餡の入った正真正銘の大福餅だ。見ただけでジーンと胸が詰まった。軍隊から一般社会を指して娑婆というが、その娑婆では絶対に見る事の出来ない物ばかりだった。お米を始め砂糖、塩、醤油、味噌等全部統制品で酒タバコも配給でしか買えないのに、出張してきた我々未成年者にまで差別なく戴けるなんて素晴らしいと思った。お酒は飲んだが、タバコは皆のを集めて、一緒に付いて来てくれた指導員に上げた。寝床は航空隊の空き部屋か、格納庫の片隅にマットを敷いて、毛布にくるまって寝るのだ。マットの中間二ケ所が綴じてあり、その間がくびれて膨らんでいて、ラクダの瘤の上に寝ているようで、全く寝づらかったが、そのままグッスリ寝込んでしまい、目が覚めたら朝だった。」

○大（「桜花」）工事

一空廠では1945年に入ると、飛行機部第二工場の一角で、特攻機「桜花」の工事（一空廠では「マル大工事」と呼ばれていた。）が始まりました。

「桜花」は、機首部に大型の徹甲爆弾を搭載した小型の航空特攻兵器で、母機に吊るされて目的地まで運ばれ、目標付近で切り離された後、固形燃料㊟ロケットからガスを噴射させて加速し（ロケットの稼働時間は僅か30秒弱）、その後は搭乗員が操縦、滑空して目標に体当たりさせるものでした。この「桜花」工事を目撃した中45回高橋邦男は、『戦いのなかの青春』に、

「昭和二〇年に入って早々に、『丸大工事』なるものが、第二工場の一角を占めるようになった。【胴体は】ジュラルミン製の小さな物体【主翼は木製で、胴体後部には推進用の火薬ロケット3本を装備している。】は、飛行機の型はしているものの、人間一人がようやく入れる操縦席があるだけであって、操縦席の前部、機体の三分の一は、一屯爆弾を抱えるようになっていた。当時想像したのは、前部にそれだけの重量があっては、人間爆弾そのものであると思っていた。」

と書いています。

終戦までに「桜花11型」が755機生産され、そのうち55機が特攻に使用されま

した。最初から航空特攻兵器として開発され、実用化された兵器としては、世界唯一の存在と言われています。

神雷部隊

「桜花」の研究・開発は、既に1944年8月から始まっていました。海軍航空本部が航空技術廠に「桜花」（発案者大田正一海軍特務少尉の名前から「マル大」と呼ばれ、制式採用されると、「桜花」と命名された。）の研究試作を命じ、9月には試作1号機が完成し、直ぐに生産が始まりました。同時に搭乗員の募集が開始され、10月1日、第七二一海軍航空隊が、百里原基地（現在の茨城県小美玉市の航空自衛隊百里基地・茨城空港）で編成されました。この部隊は、特攻兵器「桜花」とこれを目標付近まで搭載・投下する母機・一式陸上攻撃機、これらを援護する零式艦上戦闘機、その他から成る特攻部隊で、通称「神雷部隊」と呼ばれました。この部隊は、同年11月7日に神ノ池（ごうのいけ）基地（現在の神栖市にあった。）に移転し、訓練を開始しました。「桜花」での滑空訓練は、当初から1人1回のみで、一式陸攻から投下された「桜花」を操縦し、滑走路に着陸しました。しかし、「桜花」には車輪がなく、着陸は底部に取り付けられた「橇」での滑走によるため事故が多く、殉職者も出ました。

「桜花」による特攻作戦は、1945年3月21日から同年6月22日まで、第一から第一〇桜花隊による計10回が、鹿児島県の鹿屋基地から沖縄周辺の米軍艦船に向けて実施され、55機の「桜花」が出撃しました。うち10機は母機の一式陸攻から発進できましたが、他は、発進できないまま母機諸共撃墜されてしまいました。駆逐艦一隻を撃沈し、駆逐艦三隻・掃海駆逐艦一隻に損傷を与えるに留まる一方、戦死者は、420名（「桜花」搭乗員が55名、一式陸攻搭乗員は365名）を数え、戦果の割には大きな犠牲が払われる結果となりました。

神ノ池基地跡に建つ「桜花錬成之地」碑（左）と鹿屋市野里基地跡の「桜花別盃之地」碑（右）いずれも揮毫は作家山岡荘八

「神雷部隊」の一式陸攻とその下に吊るされた桜花11型（『講談社オフィシャルウェブサイト』より）

特攻隊員との出会いと別れ

特攻作戦が頻繁に行われるようになると、学徒たちは、自分たちが爆装工事を担当した飛行機で特攻に赴く隊員たちと接する機会も出てきました。特攻隊員との出会いを中45回篠田康は、

「三度目に【谷田部海軍】航空隊に出張したのは、卒業【1945年3月、4年修了で繰り上げ卒業】して動員が延長になってからだった。青々と伸びた麦が、もう穂が出揃った頃だから五月の末か六月の初めかも知れない。

（略）

夕食は、今日も銀メシに豚汁、お酒が一合、タバコが十本、大福一ケだが、オカズはポークソティだったので、またまた大感激でした。豚汁に入っている【豚肉の】細切れでさえ、絶対に手に入らないのに、肉の塊が食べられるなんて全く夢のようでした。

（略）

その晩も相変わらず、三ツに膨らんだマットでやすんだ。翌日、爆装工事をしていると、飛行服姿の若い中尉がやって来て『これは私の愛機だ、皆さんご苦労さんシッカリお願いします。これで私もお国のご恩に報いることが出来ます』と笑顔で言うその言葉に、私は何と返事をしてよいのか、恐らく二十二～三才の若さではないかと思うが、その毅然たる立派な態度に、ただ黙って頭を下げるだけで、頭の中は真っ白になってしまった。（『戦いのなかの青春』）」

と綴っています。

一空廠で修理した損壊機も、特攻機として使われました。中45回廣瀬敏夫は、

「或る時、青年将校達が、『この機は特攻隊用に廻しますか』と話合っているのを、小耳に挟んだ時、爆装して、敵艦目がけて突入して行く特攻隊員が、こんな使い古した飛行機と、一緒に死んで行くのかと思い、愕然としたことが、決して頭から離れない。（『戦いのなかの青春』）」

と書き留めています。

米軍機による爆撃で工場が壊滅し、組立て用部品の入荷も減少してくると、仕事ができなくなってきました。そのため、女生徒たちは仕事のない時間に、隣接する霞ヶ浦海軍航空隊飛行場に特攻隊出陣の見送りに出向きました。彼女たちは涙も出ず、言葉も無く、ただ死出の途に出陣する魂に、ただただ手を振るのが精一杯でした。

1944年から1945年に掛けては、中45回生からも入隊者が続きました。「動員学徒の集い実行委員会」委員長渡邉光夫（中45回）は、入隊者について、次のように認（したため）ています。

「【昭和】19年4月1日に陸軍特別幹部候補生として越川弘君が、海軍甲種飛行予科練習生第14期前期生として篠山文夫、鈴木重男、中山福男の諸君が入隊し、6月1日には小生の君原小学校時代からの親友戸張禮記君が第14期後期生として入隊したのであった。更に狩谷・小吹・玉井・長南の諸君の海軍兵学校への入校、小松崎・酒寄・田中・松尾の諸君の陸軍士官学校への入校などがあり、その都度土浦駅前広場で『若鷲の歌』『同期の桜』『勝利の日まで』などから校歌『沃野一望数百里』まで肩を組み輪になって声を限りに歌い踊り、友の壮途を祝いながらも心中に別離の悲しみを湛えた見送りが続いたのである。戦局が本土決戦必至と見られた【昭和20年】5月31日には、やはり君原小学校時代からの親友栗山光夫君がやむにやまれぬ憂国の至情から敵艦への体当たりを目的とした陸軍船舶特別幹部候補生として入隊したのは小生にとって大きなショックであった。（『戦いのなかの青春』を回想するの記」東進会報第13号・平成11年4月1日）」

渡邉らに見送られ入隊した戸張禮記は、『戦いのなかの青春』に

「今にして思えば、一ヶ月違いで予科練と航空廠に分かれたことは、同級生が精魂込めて作った飛行機に乗り、敵艦目がけて体当たりするという、分かれ道にたっていたのである。これがわずか十六、七才の、我等少年少女たちの戦いであり、青春であったのである。」

と記しています。

(注) この固形燃料は、現在の北朝鮮咸興市にあった日本窒素肥料興南工場の中の主力工場・朝鮮窒素火薬興南工場で製造されていた。この工場の建設現場主任をしていた頼本雅雄は、以前には霞ヶ浦海軍航空隊にあった「押収格納庫」の組立てにも携わっていた。

※参考文献

『戦いのなかの青春』（戦後五十年　卒業五十周年　第一海軍航空廠動員学徒の集い記念誌）
『櫻水物語　戦中派の中學時代』（中48回・高1回　屋口正一）
『忘れ得ぬあの日あの時　敗戦～北朝鮮・興南からの脱出』頼本冨夫
『阿見と予科練』阿見町
『海軍航空隊ものがたり』阿見町

（高21回　松井泰寿）

月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１１５号　　平成３０年９月１１日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

復学した土中生たち
（中 46・47 回４年次クラス写真、昭和 20 年９月頃）
前列中央の右が学年主任長南俊雄先生、左が担任岡田良典先生
（中 47 回・旧職員　小沼三郎氏蔵）

戦時下の土浦中学生１６
～第一海軍航空廠・学徒たちの戦い６～　（霞ヶ浦その 28）

通年動員も１年を過ぎ、戦局はますます逼迫、敗戦の色が濃くなりましたが、学徒たちは勝利を信じて懸命な戦いを続けていました。しかし、８月 15 日、運命の日が訪れ、学徒たちは信じられぬ思いで一空廠を後にし、それぞれの母校へ戻って行きました。
引用文中の【　】内は筆者による注記です。

動員下での受験

通年動員で授業は実施されなくなりました。更に、動員先で空腹を抱えての残業が続くと、自習をする時間的・体力的余裕も奪われていきました。しかし、逼迫した戦局の中でも上級学校への入試は行われました。そのため、寮生は夕食後の温習(自習)の時間に、自宅からの通勤者は帰宅後に、受験勉強に取り組みました。

中 45 回の川上繁(飛行機部所属)は、『戦いのなかの青春』の中で、

「今でも鮮明に残っている明るい思い出の一つは、【寮の】消灯まで数人で受験勉強に励んだことである。当時敵国語の英語も学び合った。本当に学ぶ喜びを知ったのはこの時だった。技術将校の一人が、我々をひそかに指導してくれたことも忘れられない。」

と述懐しています。

こうした努力の結果、川上たちは合格を勝ち取ることができました。しかし、上級学校や軍関係学校への入学者に対しては、「入学３ヶ月延期」の措置が採られたので、彼らは６月 23 日及び 27 日に、東京電機、中村航空兵器(後の中村鉄工所)、航空廠を退社・退庁するまで、工場勤務を続けました。その間、少しでも学びの手助けを、と援助をしてくれる人たちもいました。中 45 回桜井保之(飛行機部所属)は、『戦いのなかの青春』に

「学級担任であった石崎正雄先生が、七月まで少しでも勉強しようと、日曜日私達医系に進学する生徒数名に、ドイツ語の手ほどきをして下さったことはありがたかった。空襲警報が発令されると、近くの雑木林に寝転んで、ドイツ語の不定冠詞や不規則動詞の活用などを暗記したものである。

【海軍】委託学生(注)の中には、当時の高専【高等専門学校】生や大学生もいた。私達のグループの担当として、当時の東京帝大第二工学部の学生、高桑秀雄さんがいた。彼は、私達の仕事に余裕のある時は、数学や物理学を時々教えてくれた。その中で、流体力学の基礎法則である『ベルヌーイの法則』は、ずっと後年、血管の中を流れる血液の性状の研究にも重要な法則であることを知り、懐かしかった。」

と学びの想い出を記しています。

終戦

８月 15 日正午、終戦の勅語の放送(玉音放送)がありました。学徒たちは、動員先や学校、或いは自宅で、玉音放送を聴きました。その時の様子を中 45 回高橋邦男(飛行機部所属)は、『戦いのなかの青春』に次のように書いています。

「戦局が厳しくなってきた七月初旬、零戦脚部修理班は、工場疎開のため、荒川沖東側の民家に、工場を移して作業をすることになった。

駅より近いため、通勤には便利となった。しかし、運命の八月一五日を迎える事になった。当日正午に、玉音放送があるから、中庭に集合するよう、指示があった。

三〇人位いた工場関係者が集まって、玉音放送を聞いたが、当時のラジオは雑音がひどく、最後部にいた我々は、正直いって何の話か、内容が全然解らなかった。『戦局が不利なので、国民は全力を挙げて、戦争に対処すべし』と、勝手に解釈していた。

ただ、最前列にいた技術将校が、青い顔をしながら『チキショウ！』と叫んだのを覚えている。やがて班長から、戦争は負けて終わったと聞かされたが、実感が湧いて来なかった。負けたと実感が湧いてきたのは、自宅に帰って、家族が泣いていたので解った。

終戦になってから、航空廠の上空には、連日、航空機が飛立ち、一部の者達が戦争続行を唱え、徹底抗戦するビラが撒かれていたが、それも数日間で終わった。」

また、土浦高女生であった上野美代子の８月 15・16・17 日の日記には次のような記載があります。

「終戦の日　八月一五日

朝五時から空襲になり解除にならないまま正午を迎えた。ラジオを通じて天皇陛下のご詔勅があるというので奥座敷に父母と共に直立して拝聴する。米英ソに対し和睦を申入れたが遂に失敗に終り、皇国三千年の歴史はどうなるのか。

八月一六日

『日本が無条件降伏した』信じられない。昨夜一式戦闘機が低く飛んでビラをまいた。ザラ紙へ『天皇は絶対の御方なり天皇の軍隊に降伏なし』と大きく書いてあった。午後自転車で登校、みんな涙を流していた。柳田少尉が『これで戦争を終らせるものか、俺達はこれから戦うのだ』といった。心強く嬉しかった。

町の角々にビラが貼られていた。『特攻隊ニテ死セシ者泣クゾ　大君のふかきめぐみに浴し身は　言い残すべき片言もなし』と書いてあった。夕方海軍の人が来てビラをはがして持っていった。陸軍大臣は一昨夜切腹したと報道された。

八月一七日

登校して校長より訓話あり。『これから先いろいろの困難が来る　それらを

乗り越えて独立国になる為努力すべき事　代用教員養成の専攻科は今日限りで終り』訓示後解散。航空廠の係官が来て西運動場で図面や書類をどんどん燃やした。（『戦いのなかの青春』）」

一空廠の技術将校や工員などの大人たちは、敗戦を覚悟していたようですが、学徒たちは、ひたすら「神州不滅」「神風」を信じて、課業に励んでいました。そのため、敗戦を直ぐには信じられず、肩の力が抜け、ポカンとして一日が過ぎていきました。

退廠式

8月18日、早くも、女子挺身隊員と女子動員学徒との退廠式が、本廠内で行われました。女子挺身隊員は、1944年8月に公布された「女子挺身勤労令（勅令第519号）」で動員され、入廠しました。男子工員が徴兵されるようになり、不足する工員を補うために、14歳から40歳の内地の女性が採用されたのです。彼女たちの出身地は、県内ばかりでなく、栃木、福島、岩手県にまで及んでいました。彼女たちは、女子工員寮で食糧難に苦しみながら、慣れない機械を使って、零戦・桜花などの兵器生産のために、身を挺して国難に立ち向かっていました。

8月20日には、男子学徒と女子工員とが、本庁舎東側広場で開かれた退廠式に臨みました。その退廠式の様子を中48・高1回屋口正一は、『櫻水物語』に次のように述べています。

「八月二〇日　ズラリと並んだ高等官、高級将校を背にして、廠長は中央式台へ静かに登った。一同の眼は長身の廠長に注がれた。

『恐レ多クモ御聖断ハ下ッタ。我々ハ神州ノ不滅ヲ信ジ、国体護持ノ大御心ヲ体サネバナラナイ。……諸君ハ学窓ニ戻リ本分タル学業ニ専念シ、以テ新日本ノ再建ニ尽力シテ貰ヒタイ』

訓示は短く沈痛であった。総員『頭中【かしら なか】！』に答礼した第二種軍装に白手袋の廠長は、学徒が見た只一度の、そして最後の姿であった。

（略）

翌日土中生は第二工員寄宿舎前で物資の特配を受けた。雨傘、綾織りの綿テープ、神風印石鹸、チリ紙束等の日用品、ノート類、当時としては容易に手に入らない品々であった。名残尽きない一空廠生活と慌だしく別を告げ、入寮者は実家へ戻った。

九月下旬各生徒が動員六ヶ月間の給与として受取った金額は、三八〇円程の郵便貯金通帖であった。」

また8月21日には、動員以来389日の寮生活を送ってきた麻生中生徒も、涙ながらに引き上げて行きました。

復学

戦争が終わると、動員されていた2年生以上の生徒たちが、続々と学校へ戻って来ました。その時の学校の様子を中48・高1回屋口正一は、同書の中で次のように描いています。

「九月一日、三、四年生は半年振りに母校へ登校した。建舞【たてまい　建前・上棟式】はしたものの資材不足で骨組だけだった新講堂は、屋根と応急の外壁を張って、学校工場となり万力台が並んでゐた。

博物教室と物理教室との間の控室も又工場化し、木製架台の上に『天風』（空冷星型三〇〇馬力）発動機数台が置かれてゐた。九三中練整備器材とこれらは間もなく解体され、新品のドイツユングマン発動機数台と共に穴を掘ってそっくり埋められた。場所は元自転車置場とプール小屋の間から、真鍋国民学校【現真鍋小学校】通りへ出る裏門脇である。

戦意昂揚的事物の一掃が始り、図書室の本の半数を超える量が庭に投げ出され、残暑の中、炎となった。

すめらぎに　つかへまつれと
われをうみし　わがたらちねぞ
たふとかりける

佐久良東雄歌碑（善応寺）
1944年12月5日に竣工し、13日に除幕式が挙行された。当初は、現在の進修学習館前に建てられ、1945年9月にその地に埋められたが、1953年に掘り出され、東雄が住職をしていた善応寺へ移設された。海軍主計中将武井大助（中3回）の揮毫による。

佐久良東雄の歌碑が埋められたのは、九月半ばである。先生と生徒が代る代る万能【まんのう　農具の一つ】で礎石の後側を深く掘り、土空【土浦海軍航空隊】から復員した山崎【長次郎】先生が、振上げた唐鍬【とうぐわ　農具の一つ】でえぐる様に石のうしろ下を一撃すると、碑は土台ごとどさりと仰向けに倒れた。

（略）

銃器庫内の銃器類の処理に先立って、利用できるものが生徒へ配給になった。背嚢、水筒、帯革その他がくじ引で配られた。銃剣術防具を引当てた農家の生徒は、馬具に改造した者もゐた。小銃、銃剣の大半は本土防衛用として終戦以前に軍へ返納されたと見られ、鹵獲【ろかく　戦利品】フォード乗用車も既になかった。進駐軍が来るといふ噂に滑空班の二機のグライダーも無惨に解体された。

世間には旧軍用品が出廻った。飛行靴、軍靴、マフラー、落下傘バンド、そして軍服等々、いづれも戦中は到底手に入らぬ物ばかりであった。生徒にも軍服が目立った。海軍略帽に剣吊り付の陸兵上衣、予科練服に陸軍軍靴といった、チャンポン姿さへちっともおかしくなかったのである。」

1945年11月2日に「陸軍現役将校配属令」が、5日には「陸軍現役将校配属施行規程」が廃止されて、学校教練にも終止符が打たれました。以後、生徒のゲートル姿も先生及び上級生への敬礼も終わりを告げましたが、生徒たちが大日本帝国の軛（くびき　自由を束縛するもの）から解き放たれ、敗戦という大衝撃から立ち直るためには、いま暫くの時間が必要でした。

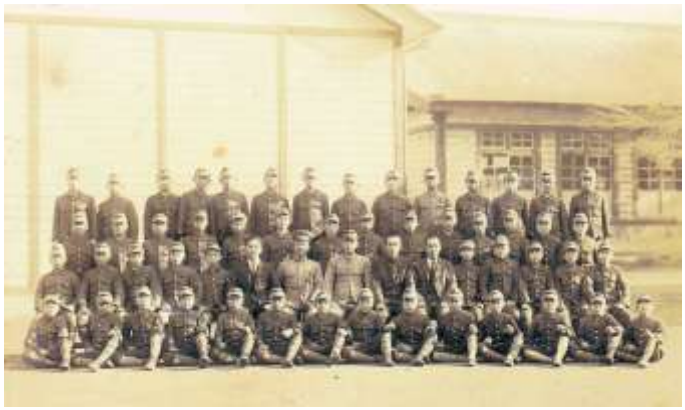
（注）海軍委託学生制度
「大学令」に基づく大学（いわゆる七帝大）の工学部・理学部に入学した新入生の中から数十名の学生を試験で選抜し、海軍の委託学生として採用する。採用された学生には、卒業後に海軍に奉職することを条件に、月額10円の学費と年間35円の被服費とが学校を通じて支給される。卒業と同時に海軍技術中尉に任官させる制度。

※参考文献

『戦いのなかの青春』（戦後五十年　卒業五十周年　第一海軍航空廠動員学徒の集い記念誌）
『櫻水物語　戦中派の中學時代』（中48・高1回屋口正一）

（高21回　松井泰寿）

月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１１６号　　平成３０年１０月９日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/



中 46・47 回　昭和 17 年度入学時のクラス写真
（中 47 回・旧職員　小沼三郎氏蔵）

戦時下の土浦中学生１７
～中学 46・47 回、戦争に苛まされた学びの日々１～

中 46・47 回生は、同一学年で、卒業年度が違う学年です（入学は 1942（昭和 17）年 4 月、卒業は 46 回が 1946（昭和 21）年 3 月、47 回が 1947 年 3 月）。今号では、2017（平成 29）年 12 月に、高 21 回松井泰寿・鴻巣茂が、中 46 回吉田義昌から伺った、戦中から戦後にかけての、氏の日々を紹介します。

引用文中の【　】内は筆者による注記です。

入学試験

1942（昭和 17）年 3 月 22 日、土浦中学の入学試験が始まりました。受験場に着くと受験生でいっぱい【志願者数 559 名、定員は 4 クラス 200 名】で、これではとても合格は無理だと思いました。学科試験はなく【1940 年の春から学科試験は中止】、内申書、身体検査・運動能力検査と人物考査【口頭試問。1941 年からは、学科試験抜きによる学力低下が懸念され、口頭試問の中に学科試験の要素も加味された。】とでした。運動能力検査には、跳び箱、高鉄棒での蹴上がりや懸垂などがありました。人物考査【受験生が多数のため 24 日から 26 日まで実施された。】では、「教育勅語」や「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」の一部について質されたり、「長男なのに家業（父は大工）を継がないのか。」とも聞かれました。「横浜からシンガポールまでの海里」を計算する問題も出されました。私は、幼い頃病弱で、小学校 2 年の時に腎炎を患い、3 年では関節リウマチで、殆ど登校できず、掛け算・割り算を学んでいなかったため、数学が大の苦手でした。この問題にはお手上げです。もう合格はないだろうとガッカリして真鍋の坂を下って帰ったのを覚えています。そんなわけで、合格発表【27 日午後 5 時】を見に行きませんでしたが、近所の同級生が、「義ちゃん、受かってるよ。」と知らせてくれたので、「まさか！」とびっくりしました。

土中生活

入学すると、国防色（カーキ色）の制服、戦闘帽、ゲートル巻きでの登校でした。正規の詰め襟の制服を着ている先輩を見ると羨ましい気もしましたが、土中生になった喜びには格別なものがありました。小桜町【現桜町 4 丁目】の自宅から徒歩で通学しましたが、先輩たちに会うと必ず敬礼をしなければいけなかったので、先輩を追い越さないように歩いていました。通学路の旧水戸街道沿いには小野座、霞浦劇場、銀映座と映画館が並んでおり（自宅近くには土浦劇場もあった。）、帰宅時にはその看板が目に付き、視たい気もしましたが、中学生の入館は、飲食店への入店も含め禁止されていて、残念な思いをしたことが度々ありました。しかし、学校から生徒全員で『ハワイ・マレー沖海戦』などの戦意昂揚映画を何回か視に行ったことはあります。『決戦の大空へ【1943 年公開。予科練生の生活と民間人との交流を描き、挿入歌『若鷲の歌』は大ヒットを記録した。】』は、主人公が土中生という設定で、本校でもロケが行われ、体育の授業のシーンでは先輩が跳び箱を跳んでいました。

授業が始まって驚いたのは、小学校では全教科を担任の先生が教えているのに、科目毎に先生が代わることです。みんな立派で、恐れ多い先生方ばかりです。【真珠湾攻撃で太平洋】戦争が始まっていましたが、英語の授業も従前どおり、変わることなく行われていました。小学校にはなかった科目なので、新鮮な気持ちで学ぶことができました。同じく、小学校にはない「教練」も始まりました。朝会で、配属将校の先生がアメリカ機の模型を見せて、「これがボーイングＢ２５爆撃機。」、「これがロッキードＰ３８戦闘機。」と、空襲に備えての敵機識別の講話も行われ、その後の教練の時間にアメリカ機の機種を答えさせられるので、私たちは懸命に覚えました。

教室では成績順に座席が決まります。成績が悪い順に前から並ばされていました。先輩が教室を覗きに来て、「吉田、お前は前から 2 列目だったな。」と何度もからかわれましたが、怖くて、先輩の教室を覗きに行く勇気はありません。しかし、その先輩方とも「金蘭隊【居住する地域別に編成された学友区隊。旧土浦町の「金蘭隊」、桜川以南の「桜南隊」、旧真鍋町の「撫子隊」、旧石岡町の「南城隊」などがあった。】」で付き合いが始まり、いろいろ面倒を見てもらいました。また、卒業後も何かとお世話になり、先輩の有り難みをしみじみと感じています。

勤労動員

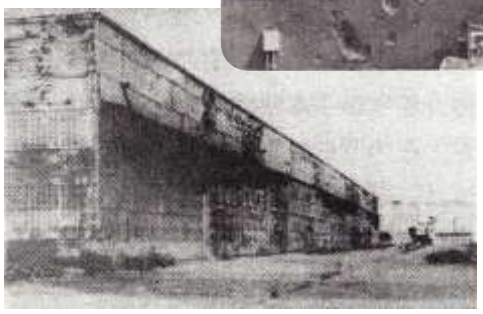
1 年次（1942 年度）には勤労作業もありましたが、授業も普通に行われていました。しかし、2 年次になると勤労動員の日数が増えてきて、指定された農家や出征兵士の家へ出掛けました。霞ヶ浦航空隊へ行ったこともあります。1 回の日数も 7～8 日間と長くなり、授業にも支障が出てきました。3 年次には更に動員の日数が増え、クラス毎に班を編成して、勤労作業に当たりました。先生方は、引率や見廻り、作業監督です。1 回の日数は 4～10 日で、勤労作業が終わると、1 週間くらい通学、それからまた勤労作業となり、4・5 年生と 3 年生とは、期間が重ならないように調整されていたようです。しかし、1944 年 7 月から 4・5 年生が通年動員となり、「そのうちお前たちも通年動員になるよ。」という声も聞こえてきました。そして、その言葉どおり、翌 1945 年 1 月、私たち 3 年生も通年動員となり、27 日に動員壮行式が挙行され、30 日に霞ヶ浦海軍航空廠に入廠しました（当初は、横須賀海軍工廠に入る予定だったが、宗光杢太郎校長が海軍と交渉し、霞ヶ浦海軍航空廠に変更になった。）。

航空廠でもクラス毎に班を編成して、各部に配属されました。私は、飛行機部で、零戦の補助燃料タンクに防水加工を施した布を貼り付けて、燃料が漏らない

ようにする作業に当たりました。本来はジュラルミン製である筈のタンクは、ベニヤ板で作られています。隣の作業場では、土浦高女の女学生も作業をしています。小学3年生まで一緒に学んでいた同級生【4年生からは男女別学】もいますが、懐かしさどころか、その姿が眩しく見えます。中高津の東京電機にも何日か派遣され、ヤスリ掛けをひたすら練習させられました。海軍は、私たちを何としても工員の代わりにしようとしていたのでしょう。

航空廠へは小桜町の自宅から徒歩で通いました。朝6時に家を出て、小松の坂を上り、右籾の航空廠には7時前に着きました。昼には弁当が出ます。木製の弁当箱を当番が受け取りに行きます。ジャガイモやサツマイモが混じったご飯でしたが、だんだんご飯の量が少なくなって、時にはイモだけの時もありました。たまに出る魚は、いつも鰊(ニシン)でした。母の従姉妹が弁当部に勤務していたので、私が当番で行くと、いつも余分に入れてくれました。それもお米だけのご飯で、分からないように上に海苔をふりかけてくれます。これには班員全員が感激し、頭を寄せ合って銀シャリを噛み締めました。

航空廠への空襲は2月16日から始まりました。空襲警報が鳴ると、全員が工具(防空壕で生き埋めになった時の脱出用)を1つ持って、防空壕に駆け込むのですが、私は、班長でしたので、班員の待避を確認するために、防空壕の最前列で待機しています。そのため、外の様子を見ることができました。ある日の空襲では、P51の機銃掃射を目撃しました。防空隊の機関砲が応戦するのですが、全く当たりません。低空飛行をしてきたP51のパイロットが、こちらを見て手を振っているのがはっきり見えました。すると、戦闘機が1機、轟音とともに墜落、爆発炎上しました。「やったぞ!」と叫びましたが、それは味方の零戦でした。烏山にあった高射砲隊の誤射により、撃墜されたようです。後で墜落現場に行ってみましたが、遺体らしきものは、片方の飛行靴だけでした。



エンジンテスト場の被弾痕(右)と破壊された大型機組立工場(下)
(『第一海軍航空廠小史』より)

同級生たちの一部は、笠間にあった筑波海軍航空隊や土浦海軍工廠から福原に疎開した工場に動員されていました。筑波海軍航空隊では実弾の装填作業に従事したようです。まさに、最前線での作業です。福原の寮の環境は最悪で、蚤・シラミの襲撃に悩まされ、食事も粗末で、栄養失調者が続出したそうです。

終戦

8月15日の終戦の放送は、自宅で聴きました。茫然自失の状態で、8月20日には、航空廠に動員となっていた生徒の退廠式が行われ、9月1日には全校生徒が登校、始業式が行われました。登校してみると、5年生は4年修了で卒業しており、私たち4年生が最上級生になっています。先生方から「お前たちが最上級生なのだから、しっかり下級生を指導しなさい。」と言われ、身の引き締まる思いがしました。

学校は始まりましたが、赤池での開墾作業や小麦の播種、甘藷掘り、援農作業などが続きました。たまの授業は、教科書の墨塗り【占領軍に対する思惑から、軍国主義に類する文字などを墨で塗り潰した。】です。10月からは授業が中心になりましたが、疎開・復員による生徒数の増加【1945年9月15日現在で1405名、1946年9月9日現在で1638名。定員は1000名】で、正常な授業が困難となり、1・3年生は午前の、2・4年生は午後の2部授業になりました。不足した机・椅子の製作も行いました。全校生徒が釘を1人3本宛て寄付する形で持ち寄り、桜川沿いの作業場で製作しました。1・2年生が材木運搬を、3年生が製作を、4年生が学校までの運搬を担当し、航空廠からの払い下げ机も加えて、何とか間に合いました。新しい教科書は配付されず、授業は、前学年で学習したことの復習や先生がひたすら講義をして板書したことを写すだけです。ようやく配付された教科書も製本されたものではなく、新聞紙大の折り目の入った紙で、ノートも配給でした。

進学・教員生活

1946年2月、「中等学校令一部改正(勅令第102号)」により、修業年限が5年に戻されましたが、私たちは、4年での卒業も可とされ、就職、上級学校受験、5年に進級という岐路に立たされました。私は当初、進級を希望していましたが、早稲田大がまだ受験できるということで、受験し、1次試験に合格、2次試験の日に土浦駅に行くと、切符を売ってくれません。切符も配給制で、「1次試験の時に配給分を使ってしまったから、ダメだ。」と言うのです。「受験なので何とかしてくれ。」と押し問答をしているうちに、列車は発車してしまいました。何とか切符を売ってもらって、受験場に行きましたが、大幅な遅刻ということで、受験は認められません。がっかりしていると、近所の先輩が、「まだ受験できるから。」と法政大の願書を取り寄せてくれました。民主主義に関する英単語を覚えるなど、一夜漬けの受験勉強でしたが、運良く合格しました。4月末、私と同じように4月に受験して合格した12名が、赴任したばかりの今宮千勝校長から校長室で卒業証書を頂きました。

私たちの世代は、満州事変の前年に生まれ、日中戦争が始まった年に小学校に入学し、太平洋戦争開戦直後に中学校入学、敗戦の年度に卒業、と戦争に苛まれた学校生活を送りました。私は、中学3年で陸軍特別幹部候補生に志願し、合格していました。しかし、年齢の関係(早生まれ)で、1945年10月に入校・入隊とされていたので、終戦で命を救われます。

大学を卒業すると、教員の道を選びました。私たちは戦争で学びの機会を奪われただけに、子どもたちには学びの喜びを味わってほしいと思ったからです。また、大学時代に野球をしていましたので、戦後の混乱の中で、荒んだ子どもたちの心を、野球を通して少しでも明るく、健やかにしたいと思っていました。学校では野球部監督・顧問を長年続け、退職後は少年野球の手伝いもしてきました。

また、平成28年度の土浦市民野球大会では、選手・主将・監督として関わってきた小桜町チームが、昭和21年の第1回大会からその年の第70回記念大会までの連続出場を達成して、表彰を受け、町の皆さんと喜びを分かち合いました。

(高21回　松井泰寿)

月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１１７号　　平成３０年１１月２０日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

中 47 回５年甲組クラス写真（1946（昭和 21）年４月撮影）
担任は高橋寅蔵先生。同級生 135 名が４年修了で卒業（中 46 回）したので、１クラス毎の人数が減っている。（中 47 回・旧職員小沼三郎氏蔵）

戦時下の土浦中学生１８
～中学 46・47 回、戦争に苛まれた学びの日々　２～

中 46・47 回生は、入学は同じ 1942（昭和 17）年度で、1943 年１月公布の、修業年限を４年に短縮する「中等学校令（勅令第 36 号）」による 1946 年３月の卒業生が 46 回生、1946 年２月の、修業年限を５年に戻す「中等学校令一部改正(勅令第 102 号)」による 1947 年３月の卒業生が 47 回生です。
今号では、今年５月に、高 21 回松井泰寿・鴻巣茂が、本校英語科旧職員小沼三郎氏(中 47 回)から伺った土中生活などについて紹介します。

憧れの土中への入学

小沼氏は、小川町（現小美玉市）のお生まれで、小川尋常小学校の卒業です。実家は鹿島参宮鉄道(注)の常陸小川駅から徒歩２～３分の所です。当時、小沼家では、桐材の製材・卸業を営んでおり、下駄や酒樽の呑口（注ぎ口の部品）の製造もしていたので、常時５～６名の職人が出入りしていたそうです。

土浦中学校の入学試験には４名が受験しましたが、２名しか合格しませんでした。毎年２～３名の入学でしたので、小川尋常小学校出身者は、全学年合わせても 10 名くらいでした。

1942（昭和 17）年４月、憧れの土浦中学校に入学しました。詰め襟ではなく、国防服に戦闘帽を被り、足にはゲートルを巻いて登校しました。先輩は詰め襟の学生服でしたので、多少羨ましい気もしましたが、１年生は全員が国防服なので、仕方が無いと思っていました。鹿島参宮鉄道で石岡へ出て、石岡から常磐線で通いました。自宅から自転車で高浜駅まで行き、そこから常磐線で通学した時もありました。６時頃に家を出て、８時過ぎに土中に着きました。土浦駅からは徒歩です。駅前通りから現在のつくば銀行の所を右折して、土浦城の北門跡に出て、新川を渡って、土中を目指しました（奇しくも、現在の住居〔土浦市中央〕の前の道を５年間通っていた。）。戦時中でしたので、同じ列車で来た者は、真鍋台まで隊列を組んで登校しました（帰りは、下校時刻が異なるため、それぞれに下校していた。）。１年生を先頭に最後尾が５年生で、５年生が号令を掛け、歩調を揃えて歩きました。先生に出会うと、５年生が「歩調取れ、頭右、敬礼！」と、大声で号令を掛けるので、全員が一斉に先生に敬礼をします。私たちは当然のように思っていましたが、軍人でもない先生方はどのように思っていらっしゃったのでしょうか。土浦高等女学校（現土浦二高）の女子生徒も一緒でしたが、列車は別車両（自然と女性専用車ができていた。）、土浦駅からつくば銀行の所までは、それぞれが道路の反対側を歩いていました。そのため、土浦高女に通っていた小川小の同級生とは１度も話をしたことがありません。

勤労動員

１年次には、ほぼ平常どおりに授業が行われていましたが、２年次（1943 年度）になると、勤労奉仕が増えてきました。春秋の農繁期には、出征兵士の居る農家へ援農作業に通いました。冬季には千代田村（現かすみがうら市）佐谷の農家に数日間分宿して、水田の暗渠排水作業に従事しました。水田を背の高さほどに掘り下げて、底に竹や粗朶を敷き、埋め戻す作業です。寒い冬の日にスコップ１つでの作業は、中学生には辛い仕事でした。農家の方々は大変感謝してくれました。食事は一汁一菜でしたが、ご飯はいくらでも食べさせてくれました。当時、既に米は貴重品になっていましたので、腹いっぱい食べた銀シャリの味は今でも忘れることができません。３年次（1944 年度）の７月から、４・５年生が通年動員となり、学校ががらんとしてしまい、寂しくなりましたが、正直、ほっとした思いもありました。５年生の教室の脇を通ると怒鳴られ、制裁を受けた者も居ましたので、１年生の時などは怖くて通れません。職員室に用事がある時でも、遠回りして行きました。それが突然、４・５年生が居なくなり、私たちが最上級生になってしまいました。それで早速、下級生に気合いを入れた猛者も居たようです。

1945 年に入ると、戦局はいよいよ逼迫し、私たち３年生も通年動員に駆り出されました。１月 27 日に通年動員壮行会が行われ、１月 30 日に第一海軍航空敞へ入廠しました。戦後、恩師の土井鱗助先生（数学科）から伺った話では、私たちは当初、横須賀の海軍工廠へ動員予定であったのを、宗光杢太郎校長と土井先生とが海軍当局と交渉をして、第一海軍航空敞に変更してもらったそうです。入廠すると、最初は養成班で、ハンマーや鏨の使い方、鑢の掛け方などの指導を受けました。その後、各部に配属となりましたが、私は飛行機部部品係となりました。各部からの注文に合わせて、部品を揃えて届ける仕事です。徴用工員の方々が部品の管理をされていましたが、発注を受けた部品が無いということはありませんでしたので、軍、特に飛行機部門には最優先で物資が配給されていたのだと思います。私たちは、発注された部品をリヤカーに載せて運んでいました。何しろ広い敷地ですので、重いリヤカーを引いて、工場内を何往復もすると疲れが出てきます。暑い日に木陰の路肩で休んでいると、後ろから若い技術将校に何度も怒鳴られました。

航空敞へも小川の実家から通いました。鹿島参宮鉄道と常磐線とを乗り継ぎ、荒川沖駅からは徒歩で航空敞へ急ぎます。航空敞も度々空襲を受けるようになっていましたが、荒川沖駅で空襲を受けたこともありました。荒川沖駅で下車すると、空襲警報が鳴り響き、「総員待避！」の声が聞こえてきました。乗客が避難を始めると同時に、Ｐ５１戦闘機が襲ってきました。私たちは線路へ飛び降り、ホームの下へ身を隠しました。航空敞を攻撃した編隊の１機が駅を狙ったようです。この頃には、毎日のように、特攻機が編隊を組んで、百里原海軍航空基地から南へ飛び立って行くのを、自宅から眺めていたので、これから日本はどうなるのだろう、と思っていました。７月初め頃、私たちの学年の１クラスが笠間の福原へ移動になりました。空襲を避けるために航空敞のいくつかの工場が疎開になったの

です。工員や動員学徒も一緒に移動し、同級生たちは工場近くの寮に入りました。旋盤の仕事に従事していたようですが、農家の納屋を改造した寮で、畳も無く、雑魚寝同然の状態でした。当時は航空敞の食事も粗末なものになっていましたが、福原は更に酷くて、栄養失調者が多数出たそうです。

戦前の荒川沖駅（『むかしの写真土浦』より）
右手前が駅舎。上りホームから牛久方面を望む。上空には霞ヶ浦海軍航空隊の複葉練習機が飛んでいる。

終戦

8月15日の終戦の玉音放送は、航空敞で聴きました。《重大放送》があるからと広場に集められ、技術将校や工員たちと一緒に聴きました。雑音が多くて何を言っているのか分かりません。しかし、戦争に負けるとは夢にも思っていませんでしたから、「本土決戦に備えて、頑張れ！」という激励のお言葉だと受け取りました。将校や工員たちがひそひそ話をするのを聴くうちに、戦争に負けたことが分かってきました。学徒たちは誰1人言葉を交わす者は無く、重い足取りで、呆然と家路を辿りました。

航空敞に動員されていた学徒（土浦中学校では2年生以上）の退廠式が、8月20日に行われ、翌21日が全校登校日となりました。久しぶりに校舎に入ってみると、校舎の天井板は、焼夷弾が引っ掛かるのを防ぐためとの理由で取り外されており、屋根組みが見えていました。中庭で集会が持たれ、そこで、2年生以上の動員生徒は8月22日から31日まで休業、1年生は学校で馬鈴薯の植え付け準備、堆肥製造、除草、馬鈴薯植え付けなどの農作業に当たれ、との指示がありました。指示に従い、自宅で休んでいましたが、その間に、校庭の一隅に設置されていた佐久良東雄の歌碑や藤田東湖の像は、軍事色が濃いとされ、埋められたようです。

戦後の土中生活

9月1日が始業式で、中庭に集合すると、国防服・軍服・学生服、学生帽・戦闘帽・予科練の制帽といった、様々な格好の生徒たちで溢れていました。予科練や少年飛行兵学校から復学してきた生徒（彼らが話す軍隊生活の様子をみんなが興味を持って聴いていた。）、疎開をしてきた生徒などで、生徒数が急増していたのです。教室はおろか廊下にまで机・椅子が置いてありました。5年生であるべき中45回生は、4年修了で繰り上げ卒業をしていたので、4年生の私たちが最上級生になっていました。先生方からは「お前たちが、しっかり後輩を指導し、土浦中学を立て直せ。」と言われましたが、後輩の面倒を見ていられるような状況ではありません。

9月中は、軍の機材の後始末や赤池の開墾、学校での農作業、出征兵士の居る家庭への援農作業に従事しました。10月に入って、授業が中心の学校生活にやっとなりましたが、古い教科書には墨が塗られ、新しい教科書はまだ配給されず、先生の板書をひたすら写していたのを覚えています。そのうちガリ版摺りのプリントが支給されましたが、教科書と呼べるようなものではありません。それでも、授業が受けられる喜びは、何物にも代えられません。しかし、12月15日から、石炭の供給不足のため、常磐線ダイヤが5割削減となり、通学生の定期券使用が停止され（1946年1月末まで）、登校不可能な生徒は自宅学習となりました。私も小川町から通学できなくなり、自宅学習となりました。教科書も無く、何を勉強してよいのか分かりません。先生方は自転車で出張し、生徒の様子を見て回ったようですが、小川町までは来られませんでした。2月には登校できるようになりましたが、4年で卒業して、就職するか、上級学校へ進学するか、中学5年に進級するかの選択を迫られました。修業年限が5年に戻され、私たちには卒業と進級、そのどちらも認められたのです。私は、上級学校進学を希望していましたが、この学力では進学できても将来は遣って行けないだろう、と思い、5年に進級しました。

3月25日、中46回の卒業式が挙行され、同級生である卒業生135名を、5年進級者144名が送り出しました。困難な時代でしたので、お互いに、「頑張れ！」との思いしかありませんでした。

進学、そして教師としての土浦一高

私は、進学して英語を学びたいと思っていましたが、自信も無く、進路を決め兼ねていました。そこで、英語科の林卯一郎先生に相談をすると、先生は、「これからは必ず英語の時代が来る。英米の文化を知る上で益々必要になると思う。小沼は英語がよくできるようだし、しっかり頑張りなさい。」と励ましてくださいました。林先生のお言葉のお蔭で、早大予科に合格、親戚の家から通学することになりました。高田馬場も空襲を受け、1つの机に何人もの学生が座って講義を受けるような状態でした。駅周辺にはバラックが建ち並んでいました。大変な学生生活を送りましたが、新制早稲田大学を卒業し、教員の道に進みました。教員として、土浦一高に19年間お世話になりましたが、その間、素晴らしい生徒たちに恵まれ、教師冥利に尽きる日々を送らせていただきました。今思えば、生徒（後輩）諸君から幸せを貰っていたと思います。

卒業回への想い

私たち昭和17年入学生は、中46・47回と二分されて今日まで来ました。何度か、「卒業回を一緒にしてくれ。」と学校側にお願いをしましたが、学校側は、「中学1回以来、何回目の卒業式ということで数えているから。」との一点張りで、埒が明きません。とうとう根負けをして諦めました。しかし私たち46・47回生は、毎年8月15日に同窓会を開き、80歳の年まで続けてきました。命懸けの動員生活を送り、苦労を共にしてきた私たちは、戦友同様の固い絆で結ばれた学年だ、と思っています。

㈱鹿島参宮鉄道

石岡～鉾田間を結んでいた私鉄で、1924（大正13）年、石岡～常陸小川間で営業を開始し、1929（昭和4）年に全線が開通した。1965（昭和40）年に常総筑波鉄道と合併し、関東鉄道の鉾田線となる。1979（昭和54）年、関東鉄道の鉾田線と筑波線の分社化により、鉾田線は鹿島鉄道となったが、2007（平成19）年3月31日の運行を最後に、84年の歴史に幕を閉じた。

（高21回　松井泰寿）

静岡県立磐田南高校同窓会諸氏来校

10月27日（土）、見附中学（現磐田南高）の初代校長尾崎楠馬・初代教頭小田原勇両先生の足跡を訪ね、浅羽浩同窓会長ほか12名が来校されました。尾崎先生は本校校歌の作曲者、小田原先生は本校ボート部設立者です。磐田南では創立100周年を控え、両先生に関わる資料を収集しているとのこと。

本校からは、大曽根宏亮同窓会副会長以下が参加。両先生の資料提供及びその説明を行い、両先生への想いや同窓会への思いなどを語り合いました。

月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１１８号　　平成３０年１２月１１日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

土浦高女の動員学徒
土浦高等女学校の生徒たちは、1944年７月から第一海軍航空廠へ動員されることになり、鉢巻きを締めモンペを穿いて、飛行機の部品作り・鋲打ち・鑢掛けなどの作業に従事した。（市川彰編『ふるさと想い出写真集土浦』より転載）

戦時下の女学生
栗栖（大竹）惠子さんは東京のお生まれ。女子聖学院在学中に東京大空襲に遭い、土浦高等女学校に転校し、第一海軍航空廠へ動員されている間に終戦を迎え、戦後、土浦高女・新制土浦二高・茨城大学を経て、教員の道に進まれました。
今号では、2018（平成30）年10月に、高21回松井泰寿・鴻巣茂が旧本館校長室で伺った、栗栖さんの小学校時代から終戦を迎えるまでのお話を紹介します。引用文中の【　】内は筆者による注記です。

戦時下の東京

1932（昭和７）年、東京府東京市王子区（現東京都北区）に生まれました。住まいは、武蔵野台地の北東端、赤羽と十条の中間くらいの所で、近くには陸軍の兵器・弾薬・資材の補給を行っていた東京陸軍兵器廠がありました。

父大竹貞吉は、土浦中学を1918（大正７）年に卒業した、中17回生です。慶応大学に進みましたが、写真の道に転じ、撮影所に勤務した後、宮内省の撮影技師となり、陛下【昭和天皇】の御真影をはじめ、両陛下や皇族方のお姿を撮影していました。戦後の1953（昭和28）年には写真集『ある日の天皇』を岡倉書房新社から刊行しています。

1938（昭和13）年４月、岩淵町立第三岩淵尋常小学校【戦後、北区立第三岩淵小学校と改称され、平成28年４月１日からは、清水小学校と統合され、西が丘小学校となる。】に入学しました。

初等科４年生の1941年12月８日午前７時、開戦のラジオ放送【「大本営陸海軍部午前６時発表……帝国陸海軍部隊は本８日未明、西太平洋においてアメリカ・イギリス軍と戦闘状態に入れり。……」】があり、登校して校庭で万歳三唱を唱えたのを覚えています。「勝った、勝った。」と大人たちは大喜びをしていたので、私もうきうきして家に帰ると、よく遊んでもらっていた近所のお兄さんが、中学校の国防色の制服・戦闘帽・ゲートル巻き姿で立っていて、「アメリカと戦争を始めたのだぞ。喜んでなどいられるか。」と叱られました。何の事かと訳が分かりませんでしたが、お兄さんは当時の日本の状況やアメリカの事をよく分かっていたのだと思います。その後、連戦連勝の報道が続き、教室では世界地図にジャワ・シンガポールと次々に占領地をマークしていきました。

しかし【1942年６月のミッドウェー海戦の敗北以後】、戦局が不利になると、私たちの生活も逼迫してきました。既に【1941年４月１日から】配給制度が始まっており、主食の米は成人男子１人１日２合３勺【330g】と決められたのを皮切りに、副食・マッチ・木炭・衣料などの生活必需品も酒・煙草などの嗜好品も配給制となっていきました。

戦局の悪化【1943年５月21日に山本五十六連合艦隊司令長官が戦死し、５月30日にはアッツ島守備隊全滅が大本営から発表され、日本軍の玉砕が初めて国民に知らされるなどした。】とともに、税金も物価も上がり、物資不足はいよいよ酷くなってきました。配給制は一応守られてはいましたが、遅配がちとなり、米の代わりに芋などの代用食が増えてきました。副食の魚などは滅多に手に入りませんでした【当時の「週刊朝日」には、特集「食べられるものいろいろ」が組まれ、ざざ虫・孫太郎虫などが美味しいと推奨する記事が載っている。】。そんな中、私を含めて子ども４人を抱えた両親が、どんなにか苦労をしていたかと思うと頭が下がります（両親はその苦労話をしたことはありません。）。

1944年に入ると、あちこちで雑炊食堂が開かれました【1944年２月に、ビヤホール・百貨店・喫茶店・食堂などの飲食店が政府により指定され、開店した。東京都内では４月末現在335軒。１日の米の配給量が２食分に減っていたので、１人１杯20銭で、事前に入手しなければならない食券が不要の食堂は大人気となった。店によっては汁ばかりの所もあり、丼に箸を立てて倒れなければ合格、倒れたら不合格との品定めもされていた。】。今なら捨てるような食材をどろどろに煮込んだ雑炊でしたが、食堂の前には長蛇の列ができていました。家族の食事を確保するために、鍋を持ってその行列に並ぶのが、私の役目になっていました。酒の仕込み樽のような円筒の鍋から大きな柄杓で、持参した鍋に入れてもらった雑炊は、ほんの少々のくず米に、大根の葉や芋のつる、皮の付いたままのじゃがいものかけらなどを、鯨の皮或いは蜆・田螺などの剥き身を出汁にして、代用醤油で煮込んだ物でした。薄いお粥のように啜れる物で、一時は満腹感を感じましたが、直ぐにお腹が空いてしまいました。栄養価が低い物を水分と熱で誤魔化しているわけですから、当然のことだったと思います。

雑炊食堂
政府公認の雑炊食堂には長蛇の列ができていた。しかし、食糧事情が逼迫し、雑炊食堂への配給も滞るようになると同時に、空襲が激しくなり、行列に並ぶどころではなくなってきた。

女子聖学院入学

1944年３月、父の薦めで滝野川にあった私立女子聖学院を受験しました。父は、1929（昭和４）年に宮内省から派遣されて渡米し、ハリウッドにあったチャップリンの撮影所で撮影の勉強をしていたので、その影響もあったのでしょう。

女子聖学院は、アメリカプロテスタント教会の婦人宣教師バーサ・F・クローソンによって、1905（明治38）年に創立され

たミッションスクールです。当時の入試には学科試験はなく、内申書・身体検査・体力テストと口頭試問による人物考査とで実施されていました。父は、体力テストの「懸垂」に備え、自宅の庭に高い鉄棒を造ってくれました。教育パパで、子煩悩な父であったと思います。

口頭試問では、神武天皇の即位の絵を見せられて、「何の絵ですか。」と聞かれました。見たことがある絵だったので、「神武天皇の即位の絵です。」と答えると、更に、「なぜ分かりましたか。」と問われました。「教科書で見たことがあります。」と答えましたが、試験官の先生は、「三種の神器が描かれているからですよ。」と答を明かし、私の答が間違いであることを優しく教えてくれました。更に、「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」について質問されましたが、「教育勅語」について聞かれるだろうと思っていたので、しどろもどろの答になってしまいました。

女子聖学院の入試では、絵を見せて感想を求める問題が出る、と近所の人から聞かされていました。しかし、思いがけない絵を見せられたので、びっくりしました。今思えば、ミッションスクールも軍国主義の波に押し流されていたのだと思います。軍や政府の方針に逆らえば、その存続さえ危うかったのでしょう。あのような問題で入試をせねばならなかった先生方は、さぞ辛い思いをしていたのだと思います。学院には外国人の生徒も何人か在籍していましたが、いつの間にか登校しなくなりました。

東京大空襲

1944年7月9日にはサイパン島が陥落し、本土空襲が現実のものになってきました。そのため、8月4日からは東京都の学童集団疎開が始まり、初等科6年の弟(栄一・高4回)と3年の妹(義子・土浦二高昭和29年卒業)は、群馬県の伊香保温泉木暮旅館【現ホテル木暮】に疎開しました。当初、父は、心配をして妹は家に残しましたが、弟を送って行った際に疎開先の様子を見て、東京よりは安全だと判断したのでしょう、何日か後に、父に連れられて妹も疎開先に行ってしまいました。小学校入学前の一番下の妹(常子・土浦二高32年卒業)は、土浦の伯父(大竹正之介。1913年卒業・中12回。高田保や下村千秋と同級)に預かってもらいました。家族が、東京・伊香保・土浦と離れ離れになりました。

年末になると、空襲の被害に遭う同級生が出てきました【アメリカ陸軍航空軍の日本本土空襲は、マリアナ諸島に基地が完成した1944年11月から本格化した。】。最初は被害生徒の家にお見舞いに伺ったりしていましたが、空襲が頻繁になると、もうそれどころではなくなりました。空襲警報が鳴ると、帰宅させられました。ある日、下校途中の王子飛鳥山で防空壕に逃げ込もうとしましたが、そこは近所の人でいっぱいでした。そのため、防空頭巾の中から空を見上げながら夢中で走り、自宅の防空壕に避難しました。5㎞くらいは走ったと思います。

連日のように大本営発表がありました【太平洋戦争中に846回】。初期には勇ましい「軍艦マーチ」が流れていましたが、そのうち「海行(うみゆ)かば水漬(みづ)く屍(かばね)、山行かば草生(くさむ)す屍【大伴家持の歌に信時潔が曲を付けた。】」と、悲しみを帯びた曲に変わり、撃滅した筈の鬼畜米英が本土空襲を始めたのです。しかし、物心が付いた時から、日本は神国だと教えられてきたわけですから、「神風が吹く。日本は負けない。」と信じ込んでいました。

1945年3月10日の東京大空襲は、自宅の防空壕から眺めていました。阿鼻叫喚の大惨事【江東区・墨田区・台東区に跨る40平方キロメートルの市街地は、完全に炎の海と化し、26万8358戸が焼失した。8万人以上(一説には10万人以上)が一夜にして焼殺され、100万人が家を失った。】となりましたが、日本軍のサーチライトに照らされたB29の機影や真っ赤に染められた夜空を何の感覚もなく眺めていました。打ち続く空襲に神経も麻痺していたのだと思います。

土浦へ疎開、そして終戦

数日後、伯父が土浦から迎えに来たので、土浦に移りました。3月9日に下校した際に、机の中に置いてきた聖書と賛美歌の本(毎朝朝礼で聖書を読み、賛美歌を歌っていた。)を取りに戻れず、そのままになってしまったのが、今でも残念でなりません。

伯父は、土浦小学校近くの田宿町【現大手町】で、「登利文商店」という小間物屋を営んでおり、既に疎開していた妹と一緒にお世話になりました。妹は独りで寂しい思いをしていたのでしょう、本当に喜んでくれました。暫くすると、母も疎開して来たので、親子3人で、田宿町の華蔵院【お不動様。沼尻墨遷の墓もある。】の近くに間借りをしました(その後、八坂神社裏の家の2階を間借りし、終戦時には亀城タクシー裏にあった6畳2間、風呂・台所付きの借家に移った。)。

4月には土浦高女の2年生に編入になりました。30名近くの転入生が、裁縫室に集められていましたが、不安そうな面持ちで顔を見合わせていました。土浦高女も授業どころではなく、農家に勤労奉仕に出掛けたりしているうちに、5月には、2年生全員が航空廠に動員となりました。支給された黄土色の作業服を着用し、土高女マークの付いた白鉢巻をして入廠しました。航空廠までは徒歩で通いましたが、戦局が逼迫して、養成班での基礎訓練どころではなく、直ぐに現場に配属され、工員さんの号令に合わせて、ハンマーで金属板を曲げる作業を繰り返しました。航空廠も度々空襲を受けましたが、体が疲れている上に、走るのが苦手だった私は、防空壕まで行けずに、工場内の作業台の下に身を隠していました。

6月10日に予科練と日立が空襲を、7月17日に日立が艦砲射撃を、8月2日には水戸が空襲を受けました。8月6日に広島に原爆が落とされると、「新型爆弾が落とされた。」との放送が何回もラジオから流れてきて、とても不安になりました。更に、「日曜に日立、水曜に水戸が空襲を受けたから、土浦は土曜日だ。」とのデマが流れ、大勢の市民が、夜になると避難をするようになりました。私たちも、都和小学校まで避難したのを覚えています。

8月15日からは、土浦小学校西校舎(現土浦一中)が学校工場となり、そこへ通うことになりました。同級生たちと「工場が近くになって楽になったね。」と話しながら西校舎に着くと、「本日正午に重大放送があるから、帰宅して放送を拝聴するように。その後、連絡があるまで自宅で待機するように。」との貼り紙がしてありました。玉音放送は自宅で聴きました。「やっぱり負けた。戦争が終わった。」と感じました。父母と私と下の妹は生きている(伊香保に疎開していた弟・妹の安否は不明だった。)、土浦は残った、これからはゆっくり眠れる、とホッとした一方、言いようのない不安でいっぱいでした。

(高21回　松井泰寿)

月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１１９号　　平成３１年１月１５日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

土浦高等女学校校舎（1945 年当時の正面玄関と奉安殿）
1899（明治 32）年、土浦中学の校舎（立田校舎）として建てられたもの。土中が 1905 年に真鍋台校舎（現土浦一高）に移転後は、土浦高女の校舎として使われることになり、1948 年からは、土浦二高の校舎として使用された。1963 年、新校舎建設に伴い、取り壊された。

戦後の学制改革の中で

昭和 20 年３月の東京大空襲に遭い、女子聖学院から土浦高等女学校に転校した栗栖（大竹）惠子さんは、動員中の第一海軍航空廠で終戦を迎えました。戦後は土浦高等女学校、新制土浦二高、茨城大学に学び、教員の道に進まれました。今号では、2018（平成 30）年 10 月に、高 21 回松井泰寿・鴻巣茂が旧本館校長室で伺った、戦後の学制改革の中での、栗栖さんの学校での日々と教員生活の一部とを紹介します。文中の【　】内は筆者による注記です。

戦後の学校生活

1945年９月に立田町の学校【1899（明治32）年に土浦中学として建てられた。】に戻ると、校舎の天井は、焼夷弾が引っ掛かるのを防ぐために取り外され、上を見上げると、鳩が飛んでいたのを覚えています。授業は、それまで使っていた教科書の墨塗りから始まりました。暫くすると、新しい教科書が配られましたが、新聞紙を折り込んだような粗末なものでした。

ある日、私は、教室で憲法の本を手にし、「戦争を放棄する。武器を持たない。」という箇所（第９条）を読み、あの苦しかった日々を思い出し、戦争の無い、新しい時代になるのだ、と胸が震え、深い感動を覚えました。疎開して来た人も多く、生徒数は急増していましたが、動員生活で生死をともにした地元の生徒たちとすっかり仲良くなり、楽しい学びの日々が蘇りました。

戦後【疎開生徒で土浦中学は満杯になっていた。】、土浦高女にも男子生徒が編入されて来ました。初めての男子生徒で、学校側は相当気を遣ったようで、「一緒に帰ってはいけない。室内で二人きりにならない。」などの注意をしていました。そうした注意に対して、私たちはみんなで「自分たちは、信用されていないのだ！」と憤っていました。

10月初めに、東京都の学童集団疎開引揚げの第１陣が帰京した、と新聞で報道されました。その後、疎開先の児童が栄養失調で亡くなった、との情報も入りました。それまで何の便りも無く、様子が全く分からないのを心配した父が、直ぐに伊香保まで国民学校６年生の弟（栄一・高４回）と３年生の妹（義子・土浦二高昭和29年卒）とを迎えに行きました。２人が父と一緒に土浦に帰って来た日、私が急いで学校から帰ると、痩せ細った弟と妹とが、きょとんとして窓際に座っていました。母は、虱だらけだった弟と妹との衣服を釜で煮沸消毒をしていました。使えない衣服は庭で燃やしたようで、その焼け屑が残っていました。その日、２人にどんな言葉を掛けたのか思い出せませんが、窓際の２人と母の姿だけは瞼の奥にしっかりと焼き付いています。家族全員が揃って、両親はようやく安堵したようです。戦後も、食糧難は続き、配給ではとても足りずに、闇米に頼る生活でした。桜橋に物々交換の店が出て、母の着物と交換に生活必需品を手に入れていました。

10月から授業も行われるようになってきました。当時、東京から疎開して来た教員も多く、素晴らしい先生方から教えを受けることができました。

音楽の鳥井善次郎先生は、パイプオルガンの奏者で、月に１度、定期音楽会を開いてくれました。時には一流の声楽家を招いて下さいました。体育の授業では、素敵な大関たか先生から正しい歩き方や社交ダンスのステップを教えていただきました。また、自分の好きな童謡を選んで、体で表現する喜びも学びました。とにかく楽しい体育の時間でした。戦争中には英語の授業が極端に減らされていたので、英語の教員が少なかったのでしょう、英語は商業の中村先生が担当されました。先生は、黒板に最初に日本文を書き、次いでそれを英訳して板書してくれました。私たちは先生が書かれた文を必死にノートしていました。専門外の科目を教える先生も大変だったと思います。その後、英語がご専門の山口勇吉先生（中27回・本校第15代校長）が赴任されて、「蛍の光」の原曲【スコットランド民謡「オールド・ラング・サイン（Auld Lang Syne）」。英訳すると、逐語訳では old long since、意訳では times gone by となる。】を英語で教えてくれました。農業の実習では、日谷広先生に「お前は転校生だろう、何だ、その鍬の持ち方は！」と叱られました。東京育ちの私は、鍬などを持ったことが無かったので、成績は、案の定、優良可の「可」でした。どの先生も、個性豊かで、一所懸命に教えてくれました。今でも、当時の先生方の授業風景やその面影が浮かんできて、懐かしい思い出となっています。

学校生活が落ち着いてくると、部活動も復活するようになりました。テニス愛好家の酒井先生のご尽力で、テニス部も復活しました。父からラケットを与えられ、テニスの面白さを知っていた私は、迷わずテニス部に入りました。テニス部の活動は、コート造りから始まりました。校庭にあった防空壕を撤去し、学校菜園であった畠を整地して、ローラーを掛けるとテニスコートが出現しました。朝は始業前、放課後は暗くなるまで練習に明け暮れました。空腹ではありましたが、戦争のあの苦しみから解放された、平和になった、その喜びがコートに溢れていました。今でもあの戦争中のことを思うと、テニスコートが再び防空壕や畠にならずに、いつまでもストロークの音と歓声とが聞こえる場であってほしい、と祈らずにはいられません。

鈴木春嶺校長、椎名茂雄教頭をはじめ、多くの先生方が、私たちの練習相手になってくれました。土浦天狗クラブの小父様たちも、時々コーチに訪れてくれました。部員たちは、勉強もよくやり、素晴らしい仲間でした。みんなの後押しのお蔭で、前衛の私は、後衛の難波（小沢）和子さん（土浦中学で英語を教えられていた小沢永次郎先生のご息女）とペアを組み、県大会で準優勝し、1947（昭和22）年【土浦高女４年時】には、石川県で開かれた第２回国民体育大会に出場することができました。

新制高校発足

1948年４月、新制高校が発足し、私たち1944年入学生は、高女５年【1946年３月に出された「中等学校修業年限延長ニ関スル通牒」により、土浦高女では、本科が１年間延長されて５年制になっていた。】と新制土浦二高

2年とに分かれましたが、授業は同じだったように思います。

1948年だったと記憶していますが、修学旅行が復活し、私たち1944年入学生は、土浦二高初、高女最後の修学旅行に出掛けました。行き先は日光でした。日光駅までは東武電車だったと思います。東照宮や輪王寺に参拝した後、日光軌道の路面電車で馬返まで行き、そこからケーブルカーで明智平まで登り、その後は、砂利道のいろは坂を歩いて登りました。みんなでおしゃべりをしながら楽しく登りましたが、年配の先生方は、大変だったようです。帰りは、いろは坂をくねくね曲がるのは面倒、と真っ直ぐ降りて来た強者もいました。華厳滝では滝壺まで降りられましたが、高所恐怖症の私は、足が竦んで、とても降りられません。

日光軌道のループ線（国鉄（現ＪＲ）日光駅前）

日光軌道は、1913（大正2）年、日光駅前～馬返の全線が開通した。山道を行く珍しい路面電車で、標高838mの馬返は国内最高地点だった。1965年の第2いろは坂の開通により、1968年に廃止された。東武鉄道東向島駅にある東武博物館に当時の車輌が保存されている。（『なつかしの日光軌道（1968年）』より転載。

夜は、中禅寺湖畔のホテルに泊まりました。食事を済ませて、部屋に戻り寛いでいると、何となく静かになり、そのうち誰かがしくしくと泣き出しました。私も、山道を歩き、静かな湖畔を目の前にして、このような大自然を忘れていたことに気が付き、何となくセンチメンタルな気分になっていましたので、泣き声に釣られて涙が出てきました。私たちは、満州事変、満州国建国、国際連盟脱退、と日本が戦争への道を突き進み始めた頃に生まれ、戦争とともに育ってきました。《欲しがりません、勝つまでは》《足らぬ足らぬは工夫が足らぬ》と犠牲を強いられてきました。空襲の中、生死の境も潜り抜けてきました。戦後も食糧難は続き、生きるのに精一杯でした。こうした緊張感が、湖畔の静けさで解き解され、ホッとした気持ちにもなったのでしょう、みんなそれぞれが涙ながらに眠りに就きましたが、あの涙は平和の喜びを噛み締める滴でもありました。

茨城大学進学

翌1949年3月の卒業式では、先輩【土浦二高第1回卒46名】、1944年入学の同級生【土浦高女本科第43回卒275名】、1946年入学の後輩【併設中第2回卒115名】を送り出しました(注)。同時に土浦高女と併設中とが廃止となり、学校は、土浦二高だけになりました。私は、新制土浦二高3年に進級しました。新制大学も発足し、主に新制高校第1回卒の方々が進学しました。しかし、茨大では、定員に満たなかったため、9月に再募集が行われました。この再募集では、高女卒でも受験が可能とのことでしたので、私も、土浦高女卒の資格で受験し、教育学部中学教育科2年課程に合格しました。極度の教員不足を早急に補うため、当時の茨大教育学部には2年課程も設けられていました。4年課程も考えましたが、父も退職をして恩給暮らしで、母の着物を売って生活費に充てるような筍生活でしたし、弟・妹の学資も必要だったので、早く教員になる道を選びました。

10月3日に入学式が挙行され、半年遅れの茨大第1期生となりました。学費は、育英資金（月額1800円）を貰って何とか遣り繰りをしました。当時、教育学部の土浦教場【茨大発足までは、茨城師範男子部・女子部が置かれていた。】は、現在の土浦三高の所にあり、土浦海軍航空隊（予科練）適性部の建物を校舎にしていました。校舎と言っても、空襲で傷付いた古い木造の建物で、教室には使い古した机と椅子とが置かれているだけでした。戦後購入した立田町の自宅から大岩田の教場まで歩いて通いました。専攻した国文科の女子は3名で、私も含めて土浦高女出身が2名、茨城女子師範から入られた方が1名でした。旧制高校や師範学校の先生方が教授になられていましたから、授業は大学に相応しいレベルの高いもので、毎時間きちんと教えられていました。私たちは、小学校の時から戦争に翻弄され、まともに授業を受けていませんでしたので、学力不足に悩まされました。特に戦争中には敵性語とされ、授業時間が減らされていた英語には苦労しました。それでも、空襲を気にしないで安心して学べる喜びに、楽しく教室に向かいました。先生方も、辛抱強く導いてくれたと思います【茨大教育学部土浦教場は、1951年3月31日、陸軍歩兵第2連隊（パラオ諸島ペリリュー島で玉砕した。）の跡地に設置された水戸キャンパスに移った。土浦教場の校舎には、同年4月1日に、土浦市立高校（現土浦三高）が移転した。】。

教員の道へ

1951（昭和26）年3月、中学の国語・英語の免許を取得し、中学教育科を卒業しました。最初の赴任校は土浦二中、19歳の春でした。

主専攻は国文科でしたが、副専攻で学んだ英語の免許も持っていたので、英語と体育の授業を持たされました。英語は新しく設けられた科目なので、全体に教員の数が少なく、土浦二中には英語の教員は配置されていませんでした。授業は苦労の連続で、毎日、教材研究に追われました。1953年2月1日から、テレビ放送が始まりました。英語の教育番組を授業で使いましたが、校長から「高校入試にリスニングは無いので、受験英語をもっと教えてくれ。」と言われたこともあります。体育は、土浦高女時代の恩師大関先生の授業を思い出しながら、何とか進めていくことができました。

戦後も食糧難が続いていました。そのため、アメリカからララ物資【戦後、アメリカの宗教団体や慈善団体などから成る組織ＬＡＬＡ（アジア救済連盟）によって供与された食料・衣類などの物資】の脱脂粉乳が配給され、給食で飲まされました。不味い、と不評でしたので、間も無くコーヒー味が添加されましたが、私には、最後まで飲み慣れない代物でした。そのためか、今でも牛乳が飲めません。

敗戦を経験した私にとって、生徒とともに学べる喜びは、何物にも代え難いものです。私たちは、戦争によって学ぶ機会を奪われました。敗戦で、日本国中の教員誰もが、「戦争は嫌だ。平和の大切さを教えていこう。」と決意したと思います。私は、教え子の一人ひとりが学ぶ喜びを感じてほしい、との思いで、33年間教壇に立ってきました。教員としての実践活動は、又の機会にお話したいと思います。

(注)併設中

6・3・3・4制教育の開始とともに、旧制中等学校に在籍する学齢（義務教育を受けることが適切とされる年齢）生徒の新制高校への入学のための措置として、1947年4月からの2年間は、中等学校に併設中学校が置かれた。1947年度には新入生を募集せず、旧制中等学校の3年生（1945年度入学）は併設中学3年生に、2年生（1946年度入学）は中学2年生になった。1949年3月の卒業式では、1943年度入学・旧制5年・新制高校1年を修了した先輩（土浦二高第1回卒）、1944年度入学・旧制5年を修了し新制高校に進学しなかった同級生（土浦高女本科第43回卒）、1946年度入学・旧制1年・併設中2年を修了し新制高校に進学しなかった後輩（併設中第2回卒）が、それぞれ卒業となった。

※栗栖惠子さんのご主人・三男さん（中45回）も土浦中学4年生の時に1年間（1944年7月から1945年6月まで）、航空廠で動員生活を送っていたが、そのことを知ったのは、結婚後、三男さんの同級生である渡辺光夫さんや栗山光夫さんたちが自宅を訪れ、航空廠での思い出話をしていた時だったそうである。

（高21回　松井泰寿）

月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１２０号　　平成３１年２月１２日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

島名小時代
昭和２年３月、茨城県筑波郡島名村立島名尋常高等小学校尋常科第６学年卒業記念(玄関前。前から２列目右から３人目が猪俣(当時は細野)三郎氏)

戦時下の小学生１　～国民学校～
1941(昭和16)年４月１日、「国民学校令(勅令第148号)」が施行され、従来の小学校が改組されて、国民学校が発足しました。国民学校は、戦時体制に即応するもので、小学生は少国民と呼ばれるようになり、否応無しに戦時体制に組み込まれていきました。
文中の【　】内は筆者による注記です。

尋常小学校・高等小学校・国民学校

日本の近代教育制度は、1872(明治５)年の「学制」・1886・1879年の「教育令」による試行錯誤の後、文部大臣森有礼の下での「学校令【小学校令、中学校令、師範学校令、帝国大学令の総称】」によって、小学校・中学校・師範学校・帝国大学などから成る学校体系が整備されました【旧制高等学校は、1894年の高等学校令に基づいて設置され、1918(大正７)年の高等学校令の改正により増設された。改正前は８校、その後増設され、最終的に31校となった。】。

この時、「小学校令」で、尋常小学校(尋常科、修業年限４年・義務教育)と高等小学校(高等科、修業年限４年)とが設置され、その後の変遷を経て、1907年(明治40)年に、尋常小学校の修業年限が６年(義務教育)に延長され、高等小学校の修業年限は２年となりました。

尋常小学校への就学率は、1892(明治25)年には男子70％、女子36％でしたが、1900年に授業料徴収が廃止されたため、就学率は1902年には90％を超えました。また、1936(昭和11)年には、尋常小学校を卒業した者のうち、高等小学校に進学した者は66％、旧制中等教育学校(旧制中学校・高等女学校・実業学校)への進学者は21％、進学しない者(就職など)は13％でした。高等小学校卒業者の半分以上は、就職したり家業を継いだりしましたが、旧制中等教育学校や師範学校への進学者もありました。特に、師範学校へは、学費が無料で全寮制でもあったために、成績優秀ながらも経済的な事情から旧制中等教育学校への進学を断念した者が、多く進学しました。

1937(昭和12)年に日中戦争が勃発し、戦時色が強まると、1941年４月１日、「国民学校令(勅令第148号)」が施行され、従来の小学校が改組されて、国民学校が発足しました。尋常小学校が国民学校初等科(修業年限６年)に、高等小学校が国民学校高等科(修業年限２年)となりました。「國民學校ハ皇國ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的錬成ヲ爲スヲ以テ目的トス。(『国民学校令』(第１条))」とされ、国家主義的色彩が濃厚に加味されました。「国民学校令」には、1944年から義務教育の年限を６年から８年【国民学校初等科６年に国民学校高等科２年或いは旧制中等教育学校２年を加える。】に延長することが規定されていましたが、1943年の「教育ニ関スル戦時非常措置方策」により、その規定は延期され、国民学校が廃止されるまで、義務教育期間の延長は行われませんでした。

戦後の1947年３月31日に教育基本法が制定・施行され、義務教育は、６年から９年に延長されました。同時に制定された学校教育法により、６・３・３・４の新学制が４月１日から発足し、国民学校初等科は小学校に、高等科は新制中学校になりました。

戦時下の国民学校

土浦市中央に住まわれていた故猪俣三郎氏は、教員の道を1925(大正14)年の島名小から1963(昭和38)年の新治中までの39年間歩まれました。その中での、戦前から終戦までの日々を、『思い出を語る１・２・３(東光寺護持会報第16号～第19号所収。氏は東光寺護持会長を長年務められた。)』から抜粋します。

１　小学校時代

私は、1906(明治39)年１月14日、美並村深谷(現かすみがうら市深谷)で、父細野守之助、母さたの次男として生まれました。今年【1996(平成８)年】の１月でちょうど満90才になりました。家は農家で、兄・姉・弟の４人兄弟でした。小学校は美並尋常高等小学校【現かすみがうら市立霞ヶ浦南小学校】に通いました。１学年１クラスで１クラス50人くらい、男女一緒です。１年から６年まで全校で300人くらいの学校でした。尋常科６年を終えて、高等科に進みました。高等科は２年です。高等科２年卒業が師範学校一部への入学資格でした。高等科１年まではそれぞれの村の小学校にありましたが、高等科２年は美並小学校にしか併設されていませんでしたから、２年になると近隣の小学校からも通って来ました。上大津とか、方々の、高等科２年の無い学校から、４、５人くらいずつ集まって来ていました。

２　師範学校へ

美並小学校の高等科２年を卒業して、師範学校【茨城県師範学校。1943年の師範教育令改正に伴い、師範学校は官立に移管し、茨城師範学校と改称された。】へ進むことになりました。入学試験は、水戸の師範学校で行われます。師範学校は、今の水戸三高の所にありました。試験は１週間くらい掛かりましたので、旅館に泊まって試験に通いました。１日１科目くらいで、すぐに採点されます。そして翌日の朝、「次の者は次回の試験を受くるに及ばず」との掲示が出され、不合格者が篩い落とされます。最後まで残りましたが、最終の合格通知は、後日、郵便葉書で来ました。

当時、師範学校一部は、４年の修業年限で、全員が寄宿舎で４年間を過ごすことになっていました。軍隊式の生活様式で、各部屋には４年生の部屋長がおり、各学年２人ずつ、１部屋８人だったと思います。部屋の中には机が４つずつ向かい合って、８つ並べてあり、その周囲にベッドが８つ備え付けてありました。

師範学校の一日は、７時の起床の合図で始まります。洗面を済ませ、朝食とな

ります。食事は食堂で全員が一緒に頂きます。1学年80人、全校では320人ですから、食堂も大きな建物でした。朝食が済むと登校です。ただ、登校と言っても、それぞれの寮から渡り廊下で教室に移るだけですから、1、2分で済んでしまいます。

授業は8時30分から、1講座45分で行われました。師範学校ですから、教育学は勿論、時間毎に教室を移動しながら、専門の教科科目も、みっちりと叩き込まれました。昼食を挟んで、3時まで授業が組まれていました。立派な先生が多かったために、授業に飽きてしまうということはありませんでした。

当時の師範学校は、授業料は要りませんし、食費も不要でした。ですから、私は小遣いだけを実家から送ってもらっていました。つまり、教員養成の費用は、全部国が負担をしていたわけです。それだけ教育を重視していたと言えるでしょう。

授業が終わると、夕食の時間までが、自由時間となります。クラブ活動をしたり、散歩をしたり、と思い思いに過ごしていました。

入浴を済ませ、夕食が終わると、7時から9時までが自習時間で、9時から舎監の先生の点呼があり、消灯となりました。9時以降も勉強をしたい者は、自習室で勉強しました。冬の暖房は、火鉢1つでした。土浦に比べ、水戸はかなり寒かったのですが、その寒さ対策は、「我慢する」ことだけでした。

当時、師範学校生は、卒業と同時に教員として採用されました。今のような採用試験などはありません。最初の赴任先は、筑波郡の島名小学校【現つくば市立高山学園島名小学校】でした。大正14【1925】年春、島名小に赴任してみると、尋常科6年生の担任でした。新採で力不足でしたが、とにかく、一生懸命教えました。担任した子供たちは、翌年の春に卒業となりましたので、僅か1年しか教えることができませんでした。しかし、子供たちは、卒業後3年に1回くらいの割合で同窓会を開き、会への招待が今でも続いています。

3　戦時下の国民学校

私は、戦時中は都和国民学校【現土浦市立都和小学校】(教頭として1940年から1944年まで)と八郷の下青柳国民学校【1957(昭和32)年に小幡小と統合。現石岡市立小幡小学校】(校長として1944年から1947年まで)とに奉職していました。中学【旧制中学】生・高女【旧制高等女学校】生同様、小学生も戦争とは無縁ではありません。

12月8日、開戦の日には、全校朝礼で校長の講話があり、各クラスで開戦の意義を説明したのを覚えています。農繁期には家の手伝いをするために、学校は休みになりました。また、5・6年生は、半日くらいの日程で、出征兵士の家の手伝い(援農)に出掛けました。桑畑の草取りなどの細かい仕事を担当しました。先生方も分担して各家を回りましたが、子供達が怪我でもしては、と心配しました。

戦争が激しくなっても、授業は平常通り実施されていましたが、お昼の弁当を持って来られない子供が出てきました。田舎の農村地域で、食糧事情は都会ほど悪くはありませんでしたが、それでも、小作の人たちの子弟などは、お昼になると教室から姿が見えなくなりました。数はそれほど多くはありませんでしたが、それだけに、その子供の気持ちを斟酌すると、何とかならないものか、と頭を悩ませました。そのうち、校庭で南瓜を作ったり、道端に大豆を植えて、収穫後は子供と一緒に頂きました。また、休耕田を借りて、子供と米を作り、取り入れが終わると、農家から釜・蒸籠【せいろ・せいろう】、臼・杵まで借りて、餅搗きをしました。今では良い思い出ですが、当時は皆必死でした。

下青柳国民学校は、複式学級でした。2学年が同じ組に入るのです。ですから、片方の学年を教えている時には、もう片方の学年は自習になるわけです。先生方は、神経を遣い大変でした。しかし、子供は自学自習の習慣が自然と身に付いたようです。下青柳の子供は、本校の小幡国民学校【現石岡市立小幡小学校】の高等科へ行って、良く伸びると誉められました。

中学や高女などの上級学校への進学を志す子供には、課外授業を実施しました。これは、先生方の全くの手弁当です。村から1・2名しか合格しないのですから、大変な難関でした。午後からは青年学校(注)が始まります。週1・2回ですが、小学校を卒業して家業を継いでいる者などに、軍事教練と学課(国語・漢文・社会・数学など)を施すものです。青年学校の校長が任命された所もありましたから、1つの学校で2人の校長が居た学校もあります。

校長として一番頭を悩ましたのは、先生の補充です。先生方にも否応無しに召集令状が届きます。令状が来れば、指定の期日までに必ず入営しなければなりません。先生が居なければ、授業はできなくなりますから、補充をしなければなりません。校長は、学区内の教員資格を持っている人を探し、お願いしなければなりません。これは、全部校長の仕事です。資格者が見つからないときには、資格は無くても、教員としての能力があると認めた人を代用教員として採用します。突然の召集で先生が居なくなるわけですから、補充の人事には本当に苦労しました。8月15日の終戦後も、9月から墨塗り教科書を使い、授業は続けられました。価値観の大転換など、大きな混乱がありましたが、とにかく、授業を続け得たということは、教育者として誇り得ることだ、と自負しております【氏は、その後、下大津中、栄中、新治中の校長を歴任し、新治中では、初代校長として、校歌の作詞もされている。】。

下高津小時代

昭和10年代前半、下高津農業青年学校の生徒とともに
（1列目、右から2人目が猪俣氏）
（水戸第二連隊将校による教練査閲時のものか。）

(注)青年学校

小学校(国民学校)卒業後の勤労青年を対象とする定時制の教育機関で、小学校(国民学校)に併置されるものが多かった。1935(昭和10)年の「青年学校令」に基づき、実業補習学校(1893(明治26)年設置)と青年訓練所(1926(大正15)年設置)とを統合して発足した。普通科(2年)、本科(男5年、女3年)、研究科(1年)、専修科(年限不定)を設けて、初等教育の補習、職業教育及び軍事訓練を施した。日中戦争の中で、国家総動員体制を担う国民を養成するため、1939年に男子の義務制を実施し、特に軍事教練を重視した。戦後の1947年、新学制(6・3制)の実施に伴って廃止された。

（高21回　松井泰寿）

月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１２１号　平成３１年３月１２日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

３年生時の学年写真
右端が担任の遮那芳江先生。戦時中であり、先生もモンペ姿であった。前列右から３人目が飯村弘。

戦時下の小学生２　～筑波国民学校～

1941（昭和16）年４月１日、「国民学校令（勅令第148号）」が施行され、従来の小学校が改組されて、国民学校が発足しました。高５回の飯村弘（本校旧職員）の学年は、国民学校最初の入学生であり、最後の卒業生でもあります。筑波国民学校での戦時中の生活を伺いました。
文中の【　】内は筆者による注記です。

国民学校入学・戦時下での日々

1941年の４月６日に、筑波国民学校【1947年から筑波町立筑波小学校、1988年からつくば市立筑波小学校、2018年からはつくば市立秀峰筑波義務教育学校】に入学し、４月１日に発足した国民学校最初の入学生となりました。１学年１クラス、60人近く居たと思います。３年生からは、男女別の２クラスになりました。用務員さんを含め、先生は、10人くらいだったと思います。

学校には立派な奉安殿があって、登下校の際には、必ず最敬礼をさせられました。また、「修身」の授業では、教育勅語を暗唱させられました。低学年では何のことかよく分からず、暗唱などとてもできません。四大節(注1)の儀式の時には、モーニング姿に白手袋の教頭が、奉安殿から教育勅語を奉戴して来て、同じく礼服姿の校長が、朝礼台の上でそれを厳かに読み上げ、私たちは、頭を下げて聞いていました。

12月８日、太平洋戦争が始まった時には、猛紅熱で長期間休んでいましたので、学校の様子は分かりませんが、母親とお針子さんたちとの話から、開戦を知りました。母親は、裁縫所を開いていて、近隣の娘さんたち12～13人が、習いに来ていました。開戦を聞いて、子供心にも、「大人になったら、兵隊になって戦いに行き、死ぬかもしれない。」と密かな恐れを抱いたのを覚えています。

戦争は始まりましたが、３年生の1943年頃までは、授業をはじめとして、通常の学校生活で、徒歩で行ける範囲でしたが、遠足も実施されていました。しかし、召集を受け、出征する兵士が次第に多くなりました。その日になると、親族をはじめ、近所の人々・子供たち、白い割烹着を着た大日本婦人会の人たち、議員などの有力者ら、合わせて50～100人が、出征兵士の家の前に集まりました。有力者の激励の言葉と出征兵士の挨拶とが終わると、青年団の楽隊を先頭にして、軍歌を歌いながら、筑波線【土浦から岩瀬までを結んでいたローカル私鉄で、1914(大正３)年開業、1987(昭和62)年に廃止された。線路跡は、「つくばリンリンロード」となっている。】の筑波駅まで行進し、万歳を三唱して兵士を送り出しました。

農村地帯でしたので、さほどひもじい思いはしませんでしたが、1944年頃からは、すいとん、蒸かし芋・ジャガイモなどの代用食が多くなり、果物は、戦地に送られたのでしょうか、全く手に入らなくなりました。ミカンやリンゴなどが貴重品となり、せいぜい正月に家族１人に１個くらいしか食べられなくなりました。

真壁国民学校の奉安殿
桜川市真壁町古城に現存している。

援農・勤労奉仕

1944年に入ると、戦局が逼迫し、授業をカットしての作業が、多くなってきました。全校生徒が、地域毎に上級生をリーダーにして、近隣の農家での手伝いや作業に出掛けました。

稲刈りや麦刈りは、小学生には難しいので、ジャガイモの収穫や苗代の害虫駆除をしました。苗の裏側に潜んでいる害虫を捕まえて、用意した袋に入れて学校に持って行くのですが、捕獲数が少ないと、先生から、「サボっていたんだろう！」と叱られました。

山には松の根っ子掘りに行きました。切り倒した松の根っ子をスコップや鶴嘴で掘り起こすのですが、小学生でも５・６年生になれば、一人前の大人と同じに見られていました。掘り起こした根っ子は、やはり学校に持って行きました。松根油を採るために、業者が回収に来ていたのです。養蚕の季節が終わると、桑の枝の刈り取りをしました。これも、業者が回収し、枝の皮を剥ぎ、水に浸して皮の繊維を取り出し、糸を作り、それで布地を作ったのです。学生服になって支給されましたが、全員には行き渡りませんでした。

地域単位でも動員が掛かり、母親と一緒に、作谷の陸軍西筑波飛行場での土木作業に駆り出されました。小学校の教員をしていた父親が、単身赴任中だったので、母親と私が呼び出されたのです。作業は、滑走路の整備のようなことでしたが、休憩時間に林の中に駐めてあった飛行機を見に行ったら、兵士から、「近付くな！」と叱られました。よく見ると、ベニヤ板製の模型で、囮機として置いて

あったものでした。小学生ながら、これで勝てるのかな、と疑問に思いました。

1944年の末頃から、陸軍の兵隊が、学校に駐留するようになり、2教室を接収して使っていました。隊長は、近隣の有力者の家から騎馬で通って来ました。兵隊と言っても、貧相な身なりで、大した武器も持っていませんでした。何をしているのかよく分かりませんでしたが、「桜花」などの本土決戦用の兵器を格納するトンネル工事を、筑波山周辺で行っていたのかもしれません。筑波山への道路脇の崖には、幾つかの弾薬庫が掘られていて、これの警備には、町の青年団が当たっていました。

軍隊でも、食料の補給が滞るようになったのか、そのうち、校庭を耕してジャガイモを作るようになりました。そのため、私たちは体育の授業ができなくなり、先生に文句を言いましたが、先生は、「敵が上陸したら、兵隊さんがみんなを守ってくれるのだから、感謝しなくてはいけない。」と言われました。武器も満足に持っていないのに、どうやって敵を遣っ付けるのだろう、と誰もが思っていました。

空襲

太平洋戦争が始まると、国民学校でも、軍事教練が実施されるようになりました。家で作った竹槍を持って行き、敵に見立てた巻き藁を突く「刺突訓練」をしました。空襲が始まった1944年末からは、空襲に備えての訓練もしました。空襲を受けた時には、地面に、できれば窪地に伏せて、両手の親指で耳を、小指で鼻を、残りの指で目を抑えているように、と教えられました。

米軍機は、筑波山を目標に飛来し、作谷の陸軍西筑波飛行場や笠間の筑波海軍航空隊などの軍の施設及び筑波山頂にあった気象庁の測候所を攻撃したようです。時には、上空で日本機との空中戦も行われていました。撃墜された飛行機からパイロットがパラシュートで脱出すると、見に行こうと走り出しましたが、いつも途中で諦めていました。見た目よりずっと離れていたのです。

1945年6月頃からは、空襲警報が頻繁に発せられるようになりました。授業中に空襲警報が鳴ると、直ぐに帰宅させられました。沼田の自宅まで普段の通学路を通ると、目立って狙われる、というので、山道を辿って帰りました。山道には藪や切り株が多く、下駄や草鞋履きの足には切り傷が絶えませんでした。革靴は勿論、ズック靴も、配給制となり、なかなか手に入らなくなりました。怪我をすると、血止めになるという野草を採って、傷の手当てをしていました。朝から空襲警報が発令されると、登校せずに、指定された家に近所の子供たちが集まり、高学年の児童を中心にして、自習をしていました。近所の子供同士で班が作られていて、援農や奉仕作業も、この班を単位にして行われました。私の班は、5年生だった私がリーダーで、私の家で自習をしていました。時たま先生が巡回して来ましたが、まだ小学生、みんな勉強などせずに遊んでいました。

麦が色付いていましたので、6月だったと思いますが、母親と2人、麦畑で農作業をしていた時に、米軍の艦載機に狙われました。艦載機が2人を目掛けて突っ込んで来た時には、生きた気がしませんでした。脅かすだけだったのか、機銃掃射はされませんでしたが、乾いた、その爆音が、未だに耳に残っています。(注2)

終戦

1945年の4月には、担任の先生が、応召・出征されましたので、クラスのみんなで餞別を差し上げました。しかし、8月15日に終戦となり、先生は、無事復員し、復職されました。嬉しく思いながらも、私たちは、先生には聞こえない所で、「餞別返せ！」と言っていました。

8月15日の終戦の日は、夏休みでしたので、家で玉音放送を聞きました。同じ班の子供たちと一緒でしたが、私たちには何のことか理解できず、大人たちの会話から、戦争に負けたことが何となく分かりました。

9月の授業は、教科書の墨塗りから始まりました。全ての教科書が墨で塗られ、「修身」の教科書などは、殆ど真っ黒になりました。進駐軍が学校にも来ることで、模擬銃や模擬手榴弾などの軍用品をはじめ、軍国主義と見做される物は、何でも学校裏の池の中へ廃棄させられました。こんな田舎にまで進駐軍は来ないだろう、と思っていましたが、間も無くやって来ました。先生方は、だいぶ心配をして、緊張していたようですが、子供たちは無邪気なもので、進駐軍の兵士たちとキャッチボールをして遊んでいました。

国民学校卒業・新制中学校入学

1947年3月に、教育基本法と学校教育法とが制定・公布されました。学制改革（6・3制の実施）により、4月1日に、国民学校は廃止され、国民学校初等科が新制小学校に、国民学校高等科は新制中学校に、それぞれ改組されましたので、1947年3月卒業の私たちが、国民学校最後の卒業生となりました。そのため、私たちは、小学校6年間を国民学校で過ごした、唯一の学年となりました。

新制筑波中学校では、筑波国民学校の高等科の教室や陸軍の兵隊が接収していたそれを使って、授業が行われました。国民学校6年を卒業した私たちが、中学1年に、高等科1年生だった者が中学2年に、2年生だった者が3年になりました。ですから、校舎も生徒たちも変わらず【戦争中の個人疎開や戦後の引き揚げなどで、生徒数は急増していた。】、国民学校の延長のような感じで、新制中学校生活が始まりました。

(注1)**四大節**
旧制度の祭日。1927（昭和2）年制定。四方拝（1月1日）・紀元節（2月11日）・天長節（4月29日）・明治節（11月3日）の総称。明治時代の天長節は11月3日、大正時代は10月31日。

(注2)**空襲体験**
高8回青山和義（本校第25代校長）も、機銃掃射を受け、その体験を次のように語っている。

「私は、東京都葛飾区金町で生まれ、昭和19年に国民学校に入学。1学期までそこで過ごしましたが、空襲を受けるようになり、父の実家である土浦市内の大岩田に疎開して、大岩田国民学校に転校しました。大岩田は、農村地帯でしたが、海軍航空隊や海軍航空廠などの軍事施設があった阿見町に隣接していましたので、空襲による被害を受けました。

阿見町の軍事施設が爆撃された日のこと。飛行機が去って1時間ほど過ぎましたので、近所の人3、4人で、田んぼの中にある畑へ野菜を採りに行きました。すると、突然、グラマン戦闘機が1機現れ、機銃掃射しながら急降下して、我々の方へ向かって来ました。咄嗟に身を伏して、難を逃れました。また別の日には、家の田んぼに爆弾が投下され、その時は防空壕の中にいましたが、入口の扉が、爆風でガタガタと震動し、防空壕が崩れるのではないか、と不安になりました。夢の中に繰り返し出てくる、忘れられない出来事です。」

（高21回　松井泰寿）